

---

# 十五年前からの復讐

Harry 英仁

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

十五年前からの復讐

### 【Nコード】

N1696E

### 【作者名】

Harry英仁

### 【あらすじ】

サークルの先輩のお見舞いで訪れた病院で、壮介たちは爆破事件に巻き込まれてしまう。十五年前に起きた毒物混入事件と絡み合い、事件は混迷の一途を辿る。そして事件を追っていくうちに、壮介は事件の中に隠された、意外な関係を知っていく……。

## 第一章 病院へ、お見舞い

「ちーす。先輩、生きてますか？」

俺は病室のドアを開け、大部屋の右奥にあるベッドで、足を吊るされている先輩に声をかけた。

しかし俺の声に対する反応は皆無であった。

「ちょ、壮介君」

後方から瑞希が俺の袖を引っ張った。何かと思い振り向こうとした時、左手前のベッドが目に入った。

そのベッドには一人の老人が、とても安らかな顔で横になっていた。

周りには家族らしき方々と医者、看護士数人が非常に緊迫した様子でベッドを取り囲んでおり、ベッド横に置いてある機械からは、ピツ、ピツと、割と間隔のあいた電子音が鳴っている。

はつきり言っつて、今の発言は気まずい。とても気まずい。

「あゝ、気付いてないよね？」

「多分。早く行きましよう」

先輩の広田がそう言っつて、俺の背中を押した。

「まったく、あの患者さんそろそろヤバいらしいんだから。後で居辛くなるのは俺なんだからな」

ベッドを囲む俺たちに、川上先輩は渋い表情を作った。

俺の名前は新谷壮介。しんたにそうすけ羽音学院大学の二回生。

今日俺は、大学で所属している写真サークルの川上宏先輩のお見舞いに、俺のカノジョである岡本瑞希、おかもとみずき後輩の広田藍と一緒、ひろたあい音市の隣町にある大学病院へ来ている。因みに彼女たちも、俺と同じく写真サークルに所属している。

さて何故川上先輩は入院しているのかというと、先日大学の階段で足を滑らせて転落し、足を骨折してしまったためである。

「でも無事で良かったです。あの時はもう駄目かと思いましたが、瑞希が安堵の表情を浮かべていた。何でも瑞希は先輩が転落した時の一部始終を目撃していたそうで、階段の下で頭から血を流し、ピクリとも動かなかった先輩を目の当たりにして、血の気が引く思いだったと、当手を振り返っていた。

確かに命に別状はなかったが、片足はギブスでガチガチに固められ、頭は包帯でグルグル巻きの状態が、果たして「無事」なのかは甚だ疑問である……。

「先輩、お花持ってきました。花瓶ってあります？」

「ああ、前にお袋が持ってきたのが、ベッドの下にあるから。サンキュ」

広田の問いかけに、先輩はベッド下を指差した。広田はベッド下から、ダンボールに入っていた花瓶を取り出し、花と一緒に持って病室から出て行った。

「土工後輩や」

先輩はしみじみと呟いた。

「なんか俺たち、ダメな後輩みたいすね」

「全然そんなことないぞ。俺が階段から落ちた時、応急処置をしてくれたり、救急車を呼んでくれたりしたそうじゃない。ありがとうな、岡本！」

先輩の感謝に溢れた眼差しは、瑞希のみに注がれていた。俺のことは……全く眼中に入っていない。

「せんぱい、俺も見て〜」

俺は瑞希の横で溢れんばかりの笑顔を作り、一生懸命両手を振った。

「俺は君たちのような後輩を持てたことを、幸せに思っている！」

「いえ、そんな滅相もない」

「一日も早く、怪我治すからな。他の部員にもよろしく伝えておいてくれ」

「あ、はい。頑張ってくださいー！」

俺はただ懸命に手を振り続けた。軽くステップも踏んだりした。俺はいつの間にか、空気と同化してしまったのか？ そうか、だから俺の存在に気付いてくれないのだ。

「そうだ、そうに違いない！」

「先輩、何踊ってるんですか？」

いつ戻ってきたのか、広田が花を挿した花瓶を抱えて俺の横にいた。

「広田、俺の姿が見えるのか？」

「はい、くつきりと」

俺の問いに、広田はキョトンとした表情で答えた。

……………

お前らなんか、豆腐の角に頭をぶつけて死んでしまえっ！

「ちよつと待つてよ」

病室を出て、大股で歩く俺の後ろを、瑞希が小走りですべていてきた。そしてそのまた後ろを、広田が全く訳判らないといったカンジですべていてきた。

「お前らなんか……………お前らなんか、イソギンチャクに喰われてしまえばいいんだ……………」

「壮介君、訳判んないよ」

俺は傷ついた……………。この病院には、俺の心の傷を治してくれる科はないのか？

「そうだ、ここはこの辺りでは一番大きい大学病院なんだ。傷ついたら心を専門に扱う外科か何かがあるはずだ。そうだ、あるに違いない！」

「ああっ、先輩が明後日の方向を向いて笑っています！ しかも半

笑いです！」

「ちよ、ちよつと壮介君！」

「どこだ、俺の本当の居場所は……………俺の、俺の楽園は……………！」  
エルドラド

「目を覚まして！」

カッコーン！

「ぬおっ！」

後頭部に刺すような激しい痛みに襲われた俺は、その場に蹲ってしまった。

後頭部を手で押さえながら顔を上げると、そこには瑞希と広田が立っていた。

瑞希の手には靴が握られていた。

硬いヒール部分を俺の方に向けて。

「先輩、大丈夫ですか？ 色々と」

広田が心配そうに問いかけてきた。「色々」ってどういう意味だ？

俺は後頭部にあてた手を恐る恐る離してみた。

「血は出てないな」

もし出ていたら俺も即入院である。「色々」とシヤレにならない。幸い頭は割れていなかったが、派手なタンコブができるのは避けられないような痛みであった。

周りを見ると、廊下を歩いていた他の患者さんが何事かといった表情でこちらを見ていた。さすがに恥ずかしいので立ち上がり、とりあえずその場を移動することにした。

「なあ瑞希、俺何であんな所で蹲っていたんだ？ 頭メチャ痛いし」病室を出てから、後頭部に激しい痛みを感じるまでの間、何をしていたか覚えていない。

ていうか、何で俺病院に来ているんだ？

……思い出せない。

「「気にしない、気にしない」」

しかし瑞希と広田は、同じ言葉を繰り返すだけで、他には何も答えはくれなかった。

俺の背中を押す二人の「妙な」笑顔が、印象的であった。

エレベーターで一階へと降り、総合受付の前を通って出口へ向かうその時であった。

ドーン！！

大きな爆発音と共に病院全体が揺れた。巨大地震のような揺れとその衝撃で、俺たちはその場に立っていることができず、転倒して床に這い蹲った。

そして爆発音が余韻に変わり始めた直後から、院内はパニック状態となり、悲鳴と怒号に包まれた。

本能的にヤバいと感知した俺は、呆然として床に手をついたままの瑞希と広田を強引に抱き起こし、パニックになる人々を掻き分けて出口へ向かった。幸い出口近辺にいたため、すぐに病院外へ出ることができた。病院前のロータリーに未だ呆然としている二人を座らせた。

俺は二人がケガをしていないか確認したが、服が少し汚れた程度で幸いにもケガはなさそうであった。

「何なんだよ、一体！」

俺は二人の座っているロータリーから、病院全体が見渡せる場所まで下がった。

すると割れた二階の窓から黒煙がもくもくと、まるで青空を侵食するように広がっていた。

## 第二章 夜、壮介のアパートにて

こんばんは、九時のニュースです。今日午後三時、ふじのかわ 梶藤野川市の 大学付属病院で起きた爆破事件について、警察の記者会見が先程行われました。警察では目撃者の証言などから、爆弾は病院の二階トイレ倉庫で何らかが爆発したものとみて、現場検証を行ない、爆弾の破片等の調査を行っています。また病院に設置されている防犯カメラの映像から、不審な人物がいなかどうか捜査をすすめる方針です。尚、今回の爆破事件により、八人の方が怪我を負い、うち一人の方は顔や腕に火傷を負い、全治一ヶ月の重症です。また今回の爆破事件に関し、現時点で犯行声明は届いていないということです。続きまして……

夜、俺はＴＶ、今日病院で起きた一件を知ることができた。

あの時、俺は事件の当事者であるはずなのに、全く訳が判らなかつた。とにかくこの場から離れなければと思い、腰の抜けてしまった瑞希と広田を、まさに「火事場のクソ力」で抱えて走った。二人を抱えて走った身体は、今頃になってあちこちズキズキと痛み始めていた。

今回の一件、概要を知ったのはニュースであった。第一報は「病院で何らかの爆発事故」であったが、数時間後、それは「病院で何らかが爆破」に変わった。

つまり誰かが病院で、何らかの爆発物を発破させたということなのである。

「先輩、お皿これでいいですか？」

「うん、ありがとう藍ちゃん」

警察の発表によると、爆発物は一つの可能性が高いらしい。一つの爆発で、あのゴツイ病院の建物が揺れ、二階の窓ガラスが割れる程の衝撃。相当の火薬量だったに違いない。これだけの被害が出て、

死者がゼロだったのは、まさに不幸中の幸いだ。

「先輩つて料理上手なんですね。すごい」

「そんなことないよ。でもトンカツは壮介君が好きだから、作る回数が多いかな」

「あ〜っ、ノロケ〜！」

しかし犯行声明が出ていないってのも気になるな。テロ組織が絡んでいるなら必ず犯行声明は出してくるはず。それが無いというなら、一体誰がどういう目的のために？

「壮介君つて、一見何でも食べられそうな顔しているけど、結構好き嫌が多いの。梅干でしょ、それからレバーに椎茸」

「プツ、何か小っちゃい子みたいですね」

「うん、意外と可愛いところあるでしょ？」

「あ〜、またノロケ〜」

……………

「あの、すみません」

俺は静かに挙手した。ちやぶ台を挟んで、お皿に料理を盛り付けている瑞希と広田は、きよとんとした顔でこちらを見ていた。

ちやぶ台には、いつの間にか三人分の食事の用意がされていた。

「何ですか？ これ？」

「へ？ トンカツですけど」

うん、それはみたら判るよ、広田藍ちゃん。

「んなこと聞いてんじゃねーよ！ ヤダ何この人、これをトンカツと知らないで今まで食べていたの？ チョー可愛そ〜って目で見てんじゃねーよ！」

「せ、先輩、それは言いがかりですよ」

「そうだよ壮介君。藍ちゃん、チョーとか言わないし」

一人だけ突っ込みどころがズレている瑞希であった。

ちやぶ台の上を見直すと、トンカツの他、ご飯と味噌汁、そして真ん中にはキャベツが山盛りになったボウルが置かれており、準備万端である。ていうか、こいつらいつの間にか俺の部屋に上がりこん

で、用意をしていたのだろうか？

「フフツ。これはね、私たちからのお礼よ」

先程ズレた突っ込みをしていた瑞希が、俺の横に座った。

そして両手を、俺の肩においた。

「壮介君、私たちのこと必死に担いで、病院から出してくれたよね。あの時、私たち腰が抜けちゃってて、全然動けなかったの。だから、壮介君が助けてくれてなかったら、私たちもしかしたら怪我してたかもしれない。ありがとう」

そう言っつて、瑞希は俺の肩を揉んでくれた。その手つきはとても優しく、どんなマッサージよりも癒されるような気がした。

「瑞希……」

俺は瑞希の手を握り、笑顔を作ってみせた。

……何だかいいカンジになってきた。

「ああ、私何だかお邪魔虫みたいですよ……」

しかし、広田は少し居辛そうな感じであった。

「ああ邪魔だ。お前はもう帰れ。これから大人の時間だ」

「……ええっ！」

勿論俺は冗談のつもりだが、広田は俺の言葉にマジで驚き、そして俺と瑞希をまじまじを見つめ、顔は耳まで赤くなった。

お前は「大人の時間」と聞いて、一体何を想像しているんだ？

瑞希たち手作りの夕食を食べ終えた後、広田と瑞希は俺のアパートを後にした。瑞希はもう少しいたそうだったが、俺もいてほしかなかった。後で広田にどんな想像（というか妄想）をされるかわからなかった。一緒に出ることもなかった。瑞希も俺と同じく独り暮らしをしているので、自転車で自分のアパートへ帰っていった。広田は夜も遅いということで、駅まで送ってやった。

駅からの帰り道、今日病院で起こったことを思い出していた。

これは一体何なんだ？

無差別テロか、それとも「誰か」を狙ったものなのか。

現時点では情報が少なすぎる。明日の朝になれば、新聞やワイドショーが一斉に今回の事件を報じる。そうなれば真偽はともかく、様々な情報が出てくるだろう。それを見て色々考えてみよう。今回のことを。

.....

ああ、俺の中にいる、好奇心の虫が蠢きだしてきちゃったよ.....。

### 第三章 かつて、渦中の人

翌日。

午前の講義が終わり、昼休みとなった。待ちに待った昼食タイムだ（といっても、大学の講義スケジュールは学生によってバラバラなので、みんながみんなというわけではない）。

俺は瑞希と一緒に売店へ行ってパンと水を購入し、写真サークルの活動室へ向かった。

昼食の場所だが、瑞希と一緒にの時は大体次の講義がある教室か、空き教室で食べている。しかし今日に限ってサークルの活動室で食べることになったのには、一つの大きな理由があった。

そこにTVがあるからである。

そしてTVで観たい内容も決まっていた。昨日の爆破事件の続報である。

実の所、昼のワイドショーなんて朝の帯番組と大して変わらない内容なのだが、俺も瑞希も朝はギリギリまで寝ているダメな大学生なので、昨晚からの進展を未だ確認していなかった。

「ういゝす」

「失礼します」

活動室に入ると、先輩が数人TVを観ながら昼食を摂っていた。何を観ているのか、俺はパンと水の入ったビニール袋をテーブルの上に置いて、TVへと近付いた。

「おう、お疲れ。例の爆破事件の続報、やってんぞ」

俺の存在に気付いた先輩が、顎で俺にTVの方へ促してきた。何か新しい情報が出てきたのだろうか。俺は画面に注目した。

「狙ってたのよ！ 絶対、絶対私のこと狙って、あそこに爆弾をおいたのよ。私はつきりと見たんだからね！」

TVに映し出されていたのは、記者に囲まれてがなり続ける一人の女性の姿。

年齢は五十代後半くらいであろうか。パーマをあてたショートカットに、ケバいい化粧。一見すればどこにでもいそうなオバチャンである。

「……で、これは一体何なんですか？」

「だから昨日の爆破事件だって」

昨日俺は事件のあった病院にいたが、このオバチャンの存在は知らない。このオバチャンと今回の事件に一体何の関係があるというのか？ 一応瑞希にも確認するため視線を送ったが、やはり判らないのか両手を広げ、首を振った。

「誰です？ このオバチャン」

すると先輩はニヤツと笑った。今の発言のどこに、笑う所があったのだろうか？

「そうかお前、白川十末子しろかわとみこを知らない世代なのか」

白川十末子。……何か聞いたことのある名前だ。でも、顔とか背格好は全く思い出せない。

「誰なんです？ その白川って人。名前は聞いたことあるような気がするんですけど」

瑞希も俺と同様であり、白川十末子について身を乗り出して訊ねてきた。

「お前らって、そういう世代なんだな。俺も歳をとったな。つっても、そんな離れてもないし、いう程昔でもないが……」

先輩は何かをブツブツ言っている。早く教えろっつーの！

「はいはい、そんな顔するなつて。この白川つてのは、十五年前に起きた毒物混入事件の容疑者だった人なんだよ」

「容疑者？」

そんな人が何故？

「この白川十末子も、病院爆破の現場にいたんだつてさ」

俺の心中を見透かしたように、先輩はそうフォローを入れてくれた。

「これはね、絶対私のことを狙ってたのよ！ 私がトイレに入った時に、変な人影が後ろからついてきて、持っていたダンボール箱を用具入れの中に置いて出て行ったの。おかしな人だなんて思ってたから、爆発したの。あれは絶対私の命を狙ったものに違いないの！ もう、警察は一体何をやっているの！」

TVの中で、白川が暑苦しい顔でヒステリックにまくし立てていた。爆発時に負ったのか、頬には絆創膏が張られていた。

白川はかなり興奮した状態で話しているので、聞いていても何を言っているのか、あまりよく判らなかつたが、画面がスタジオに切り替わってコメンテーターの話となり、そこでようやく白川の置かれていた当時の状況を掴めることができた。

爆破事件当日、白川は診察をうけるため大学病院を訪れていた。診察終了後、トイレへと向かった際、入口でダンボールを胸に抱えた女性と鉢合わせになった。白川は先にトイレの中へと入るが、その女性は抱えていたダンボールをモップ等が保管されている用具入れに入れ、用を足さずに出て行った。白川は不審に思いながらも、用を足そうと個室へ入ろうとした時、爆発が起こった。因みに、女性の顔は帽子と色のついた眼鏡でよく判らなかつたそうである。「でも、だからといって、この人が狙われたかどうかは判らないと思うんだけど」

俺の隣りでTVを観ていた瑞希が、そう呟いた。

俺も同感である。今TVで説明された白川の状況を考えてみて、この爆発物が白川を狙ったものとするには少し無理がある。

「単純に、って言ったらおかしいけど、病院自体を狙ったんじゃないのかな」

先輩の一人が瑞希の呟きに答えた。状況から言えば、そう考えるのが普通である。白川はその現場に、運悪く遭遇してしまった。それだけのよくな気がする。

「何だか、被害妄想的だな」

俺はTVの前を離れ、テーブルの上に置かれたパンの入った袋に

手を伸ばした。

現場の状況からみて、この爆破事件が白川を狙ったものである可能性は低い。もし本当に殺るなら、こんな間接的かつリスクの高い方法は選ばないと思う。正直言っただけの話である。

しかしこんなバカな話を、TVは大真面目に報道している。これは一体どういうことなのか？

「んで、ここで繋が<sup>つ</sup>ってくるわけにえ。その十五年前の事件ってによが」

「そ、壮介君。パン食べながらしゃべるのはやめようよ」

因みに今日のメニューは、アンパンといちごジャムパン。口の中がネチヨネチヨする。

「詳しく見てみるか？」

先輩の一人はそう言っただけで、活動室の隅に置かれているパソコンのスイッチをONにした。

### 『藤野川毒入りたこ焼き事件』

#### 概要

平成 年八月十日夜、 県藤野川市中野地区で催された夏祭り  
で、町会の屋台で振舞われたたこ焼きを食べた人が、下痢や腹痛、  
吐き気を訴え、病院に搬送された。搬送中に意識を失い、その後死  
亡する人もいたため、警察がたこ焼きと吐物を検査したところ、農  
薬の成分を検出。現場の状況から、何者かが何らかの方法で、たこ  
焼きのたねに毒物を入れた可能性が高いと判断。県警は捜査を開始  
した。

#### 容疑者

同年八月三十日、警察は中野地区在住（当時）のパート従業員、白川十未子を殺人と殺人未遂の容疑で逮捕する。物的証拠は無く、夏祭り参加者の証言等による状況証拠を積み重ねての逮捕となる。犯行動機について警察は、白川十未子は以前より地域住民との関係が上手くいっておらず、また同年七月に夫である白川悠三<sup>ゆうぞう</sup>を事故で亡くし、その告別式の際にも、地域住民とトラブルを起こしていた。それらにより白川十未子は今まで溜まりに溜まっていた地域住民らに対する不満が爆発し、犯行に及んだと判断。尚、白川十未子は逮捕直後より容疑を全面的に否認した。

### 裁判

同年十月一日、白川を容疑者否認のまま、殺人と殺人未遂で起訴。検察側は今回の事件について、「日頃から地域住民らに対して不満を感じていた白川十未子は、夫の告別式で起こったトラブルにより不満が爆発。地域住民の無差別殺人を計画し犯行に及んだもの」とし、白川十未子を追求した。

その後裁判が行われる。当初、白川の有罪が濃厚であると言われていたが、やはり物的証拠が無く、夏祭り参加者の証言等での組み立てが中心となり、意外にも苦しい裁判運営を強いられることとなった。また頼みの証言についても、目撃者の記憶が曖昧なものであったりするため、決め手となる証言が得られずにいた。逆に、夏祭りに参加していた女性（匿名）より、検察側が主張する白川がたこ焼きに農薬を入れた時間帯に、別の場所で白川を目撃したという証言があり、検察側は日に日に劣勢となっていた。

事件から五年後、地裁は白川に対し、「証拠が不十分」「毒物を入れることができたのは、白川だけとは言い切れない」として無罪を言い渡す。検察側は判決を不服として、即日控訴する。

地裁判決から二年後、高裁は地裁判決を支持、検察側の訴えを棄却する判決を出した。その後検察側は控訴を断念。よって白川の無

罪が確定した。

その後

無罪確定後、白川は多数の出版社、TV局を相手取り、名誉毀損等の民事訴訟を起こす。この背景には、逮捕前後に加熱した報道により、自身のプライベートを曝け出されてしまった経緯がある。

また事件直後から白川の自宅周辺に落書きや中傷ビラといった嫌がらせが後を絶たず、裁判で無罪が確定した後も続いた。白川は自宅に防犯カメラを設置する等に対応するが、あまり効果は見られず。結果白川は自宅のある中野地区を離れることとなる（現在白川宅は取り壊され、空き地となっている）。

「なるほどねえ。何となく思い出してきた」

白川が関わった『毒入りたこ焼き事件』について、インターネットの未解決事件を扱ったサイトで、一連の流れについて知ることができた。今更ながら、便利な時代になったものだ。

「これって今から十五年前の事件だね？ 私たちはその時五歳。よく覚えてないのも無理ないよ」

瑞希の言とおおり、当時の俺たちは幼稚園児。しかも生まれ故郷はこの地方ではないから、事件について何の関心もないのは当然といえは当然。俺が思い出したのは、白川の裁判について。有罪か無罪かという論議を何度かニュースで観たことがあった。

「そういえば、戸山教授は中野の近くに住んでいたと思うぞ。他に詳しいこと知りたかったら聞いてみたらいいんじゃない」

戸山教授というのは、俺が受けているゼミの先生。小汚いボサボサの白髪頭と、文系のくせに何故か羽織っている白衣がトレードマークである。ゼミ生の間では「とつつあん」と呼んでいる。

「ぶっん、とつつあんがねえ。暇な時に一度訊ねてみるか」

「いや壮介君、戸山教授はそれなりに忙しいと思うよ。確かによく学内ブラブラしてるの見るけど」

俺がゼミ以外でとっつぁんに会うと、いつも暇そうにしており、よく研究室や食堂に誘われる。いつ自分の研究を行っているのだからかと疑問に感じるのだが……。

「そうかなあ。まあこういう時に限って、向こうが忙しくて会えないっていうのがお約束なのかもな」

俺は瑞希にそう答え、アハハハハと笑いあった。

「おお、新谷じゃないか」

昼食を終えて次の講義が行われる教室へ向かう途中、白衣を着た小汚いオッサン……もとひとつつぁんに「偶然」出くわした。

手には何故か虫取り網が握られていた。

「何をしようとしてるんですか？」

恐る恐る訊ねてみた。この人はたまに俺たちの想像を遥かに超えた（くだらない）ことをする。

「いや何って、これから駐車場裏の林へクワガタを捕まえに行くんです」

……呆れて何も言えないというよりも、ツッコミどころが多すぎて、どれから手をつけていいか判らなかった。

「どうしたんだ？」

とっつぁんは視線を逸らし押し黙る俺たちを、とても不思議そうに見ていた。

「いや、そんなマジで何？ みたいな顔されても。ツッコミどころが多すぎて……」

「スミマセン、今の季節にクワガタはいないかと……」

するととっつぁんは、手に持っていた虫取り網を俺たちの前にかざしてみせた。

「いやいや、もしかしたら越冬クワガタがいるかもしれない。捕まえたら、娘に見せびらかしてやろうと思ってね。お父さんの株アツ

ブに繋がるぞ」

無駄に格好よく虫取り網をかざしたが、出てきた言葉はあまりにくだらない。

因みに、とつつあんは四十を過ぎてから結婚。現在は奥さんと、幼稚園に通っている、孫のような一人娘の三人家族である。

アホなのか？ このオツサンはアホなのですか？

瑞希の方へ視線を送ると、瑞希は完全に目が泳ぎ、俺にすら視線を合わせてくれなかった。

「要は……暇なんですね」

俺は思わず、言うてはいけない本当のことを口にしてしまった。

「いやいや、クワガタ探して忙しいのだ」

再び俺たちの前に虫取り網をかざしてみせてきやがった。

……

すみません、俺が間違っていました……。

(壮介君、ガンバツテ)

かすかに、瑞希のものと思われる声が聞こえた。

……どう、ガンバレと？

午後の講義終了後、俺はとつつあんの研究室に来ていた。

この研究室、広さは大体八畳くらいなのだが、それを全く感じさせないくらい、本で埋め尽くされている。人間が活動できるスペースは、トータルで二畳程しかない。本その他にあるのは、机とパソコン、小型の冷蔵庫にトースター。

俺は冷蔵庫を開けてみた。

中には本が所狭しと詰め込まれている。

初めて見る人はこの光景にドン引きするであろう。しかしゼミ生にとっては「いつもの光景」なので、もう驚くことはない。

一応言っておくが、ドン引きする方が普通の反応である。この光景に慣れてしまった、俺たちゼミ生がおかしくなってしまうのだと思う……。

「君も一つどうだ？」

とつつあんは俺に煎餅をすすめてきた。一ついただくことにする。ちよつと湿つばい煎餅を食べ終わった後、俺は今回研究室にやってきた理由を伝えた。

それは十五年前に起こった、あの事件について。

「ああ、たこ焼き事件ね」

略すると何て緊張感のない事件名なのだろうか。

とつつあんは立ち上がり、扉近くの本棚の前から一冊の雑誌を俺に手渡してきた。

それは事件当時に発売されていた週刊誌であった。開くと一ページ目から事件についての記事が掲載されていた。

「実はね、当時ちよつとした縁で、事件についての資料を集めていたんだ。大半は私の自宅に保管しているのだが、その雑誌だけ研究室に埋もれていたんだ。それでね……」

俺はとつつあんの話テキストに右から左へスルーしながら、いくつもの関連記事に目を通していった。

事件の概要についての記事は、昼にインターネットで見たこととほぼ同一であった。ただ、この雑誌で多くのページが割かれていたのは、当時まだ「疑惑の人」であった白川のプライベートについてであった。

「いやあ、あの頃はスゴかったんだぞ。市内をTV中継者が走り、警察の前にはいつもマスコミが大勢待機。逮捕の日は朝からヘリコプターが何機も飛んでいた。藤野川が一気に有名になった事件だったよ」

俺は生返事をしながら記事に目を通す。記事の内容は、正直「あることないこと書いてます」という印象。素人目にも信憑性に欠けるものであった。

また白川に対する嫌がらせについての記事も掲載されていた。最初は無言電話にピンポンダッシュ。それらがどんどんエスカレートし、投石や「殺人夫婦は出て行け！」等と書かれた中傷ビラが撒か

れたりしていたようだ。

「……てなカンジで凄まじい時代があったんだ」

何だが話が脱線しているようだったので、もう気にしないでおう。次のページをめくると、被害者についての記事が掲載されていた。

被害状況（八月二十日現在）

死亡

三倉 ちヨ（七十七）

畑山 正憲（二十一）

下村 大和（十二）

斉藤 千恵美（九）

この他、意識不明の重体二名を含む二十五人の方々が入院中となっていた。

インターネットの方には具体的な被害者の数が書かれていなかったため、具体的な被害状況を、俺はここで初めて知った。

老人から子供まで、四人もの人間が亡くなっている。この事件、死者が出ていることは知っていたが、具体的な数を示されると、この事件がどれほど重大で、痛ましいものか、ここでようやく実感できた。

「ところでつつあん。さっき、ちよつとした縁って言うてけれど、それって何なの？ 探偵でもやってた？」

そういえば、小汚いボサボサの頭が、有名な某探偵と似ている。一応念を押すが、あくまで「小汚いボサボサの頭」のみである。

「……さっき話したじゃないか。聞いていなかったのか？」  
とつつあんは呆れたように顔をしかめた。

スミマセン、聞いてませんでした。

「全く……。え、事件の容疑者だった白川十未子さんの旦那さん

である白川悠三さん、彼は私の大学の先輩なんです。学生時代色々世話になったことがあるので」

……意外な事実発覚。

世間で、意外と狭いんだなあ。

心の中で、某相田さんぽく呟いてしまった。

## 第四章 広田藍、跳ぶ！

その後、俺はとつつあんから、事件当時の雑誌を借りて研究室を後にした。

そして俺は次の講義の行われる教室へと向かった。ケータイを見ていると瑞希からメールがきており、先に教室へ向かうとのことであった。

次の講義、教室は四階。正直エレベーターで一気に上がりたいたいのだが、この大学のエレベーターは狭くてなかなか来ない。待っているより、階段を上った方が早く辿り着ける。

研究室のある棟から移動し、階段を駆け上がる。そろそろ講義開始なので、他の学生たちも慌しく階段を上り下りしていた。

「あ、先輩」

二階と三階の間にある踊り場から数段上がったところで、聞き覚えのある声が聞こえた。

見上げると、上り階段の先に広田が立っていた。

「おう、おいつす」

俺は片手を上げ、広田に挨拶をしようとした、その時だった。

「キヤッ！」

「あっ！」

下からではよく判らなかったが、広田が何かの拍子に階段を踏み外した。

そしてバランスを崩した広田は、階段の上でよろけ……、

「ひゃっ！」

「危ない！」

跳んだ……ようにみえた。

実際は階段を数段転げ落ちた。周りに俺を含めた数人の学生が受け止めたので、下まで転落するのは防ぐことができた。

「おい、大丈夫か！」

俺は広田の身体を抱きかかえ、とりあえず踊り場まで移動した。

「い、いたた……」

意識はある。しかし右足首を押さえ、苦痛の表情を浮かべていた。

「ちよつとみせてみる」

俺は広田のGパンの裾をめくってみた。段差の縁で切ったのか、出血していた。

「痛っ！」

俺が足に触れると、広田は身体に電流を流されたような反応を見せた。今のは切ったところを触られたことでの痛みではない。

そして次第に、足首が腫れてきているようにみえた。

もしかして、骨に異常が……？

「おい、誰か手伝ってくれ！ 医務室へ運ぶぞ！」

「痛っ」

「あゝ、やつちやつたかも」

俺は広田に付き添って医務室へ来ていた。医務室まで、場に居合わせた他の学生に協力してもらい、医務室まで移動した。

医務室でとりあえず切り傷の処置をもらった。けっこう出血していたが、傷自体は浅いものであった。

しかしそれ以上に厄介なことになりそうだった。

医務室に到着する頃になると、広田の右足首はプックリと腫れあがっていた。医務員さんが足の状態をみると、一瞬で表情が曇った。

「とりあえずコールドスプレーとテーピングで応急処置をしましょう。でもこれ以上の処置は、ここではできないわね」

「ということ……、」

「折れちゃっているんですか？」

広田が泣きそうな顔で俺に訊ねた。悪いけど、俺に聞かれても判らない。

「そこまでは……。ちゃんとレントゲンを撮ってみないと判らない。とにかく、早くちゃんとしたお医者さんへ行くことね」

「医務員さん、この近くに病院つてありますか？」

「この近くに病院……。足つてことは整形外科だよな。」

「佐野クリニックがある」

俺の言葉に、医務員さんも思い出したかのように手を合わせた。

「そうね。佐野クリニックなら、大学からすぐだし、バス通り沿いにあるわね」

ということ、応急処置が終わってから、俺は広田を連れて佐野クリニックへと向かった。

「ういゝす」

「先輩、いくら何でも病院でその挨拶はないと思います」

俺の後ろから、松葉杖姿の広田がツッコんできた。

「いいんだよ。ここは俺の馴染みだから」

この佐野クリニック。大学からも近く、歩いても十分そこから来れる所なのだが、足を怪我した今の広田にとつて、そのくらいの距離を歩くことも困難な状態。大学前からバスでここまでやってきた。「要は先輩のかかりつけなんですね」

佐野クリニックは、俺が羽音市へ引越してきてからお世話になっている病院で、整形外科の他にも内科と皮膚科、リハビリ科も併せている。この病院を選んだ理由は、名医がいるとか看護師さんが美人とかではなく、単にアパートから一番近くにある病院だからである。

待合室に視線を移すと、数人のじーちゃんばーちゃんが長椅子に座っていた。このじーちゃんばーちゃんたち、病院に来ているのだからどこか悪いはずなのだが、待合や診察室で楽しそうに談笑している姿をみるので、一見してどこがどのよう具合が悪いのか判らない。待合には大画面のTVも設置されており、病院というより憩いの場というカンジだ。

「あら新谷君、いらっしやい」

受付の奥から、一人の看護師さんが出てきた。

「どもつす」

俺は片手を挙げ、軽く挨拶をした。

「……………」

すると俺をジロジロ見始めた。否、俺だけじゃない。俺と広田をジロジロと見ている。

「あの、何か？」

すると何故か苦笑い。

「新しいカノジヨ？」

「違います！」

広田が俺のカノジヨ…………何て激しく、危険な誤解なんだ。

「先輩、そんな即答しなくても…………。ちよつとシヨックです」

ツッコむところが違う！ 瑞希がいたらどうなっていたか…………。

「あら違ったの？ てつきり新しいカノジヨを見せびらかしにきたのかと思つちやつた」

「いくらいつもお世話になつてるからつて、そんなアホなことは考へません！」

しかし俺のツッコみを尻目に、再び受付の奥へと消えていった。

ケタケタ笑いながら…………。

「先輩、あの人誰ですか？」

広田がそう訊ねてきた。

広田の頬が赤くなっているのは、あえてスルーしておこう。

「ああ、あの人は佐野文子さん。看護師でここの院長夫人。若く見えるけど、もう三十路ど真ん中だ」

「先輩、そこまで聞いてないです」

何でも、元々別の病院で勤務していた文子さんを、院長である佐野先生が一目惚れ。ストーリーカースレスレの熱烈アタックを受け（文子さん談）、結婚に至つたのだそうで、所謂玉の輿つてヤツだ。

「先輩、とりあえず座つてもいいですか？」

よく考えたら立ちっぱなしだった。

「ああ悪い。お前保険証は？ 出してきてやるから、そこに座つて

る」

「はい、ありがとうございます」

俺は広田の保険証を持って受付の前へ。

「文子さん」

名前を呼ぶと、奥から文子さんが出てきた。

「………何でメス持つてるんですか？　ここで使うことなんてないでしょ」

俺の問いに文子さんはただただ微笑んでいた。一瞬空気が凍りついたような気がした。

「こ、これ保険証です。お、俺のじゃないですよ。あそこに座っている後輩の娘ので。整形でお願いします」

すると文子さんは微笑み、右手にメスを持ったまま、俺の差し出した保険証を受け取った。

一つ思い出したことがあった。

文子さんは「三十路」という言葉に、とても敏感だということを知った。

………

待合室に腰を下ろして、もうすぐ一時間。未だに名前は呼ばれていない。

待合の先客は数人だったが、一人一人にかかる診察の時間が長い。ため、すぐに順番が巡ってはこない。

広田は一応急患なのだが……。

「私は別にいいですよ。命に関わるってわけじゃないですし」

当の広田はというと、待合に置かれてある雑誌を読んだりして寛いでいる。足首は痛むが、テーピングにより、我慢できない程ではないとのこと。

「でも先輩は大丈夫ですか？　もうすぐ時間じゃ……」

今日、俺は夕方からバイトがある。だからこの調子で待ち続けていると時間に遅れてしまうのだ。

広田一人を残していても、別にどうってことはないと思うのだが、一応瑞希にメールを入れておいた。瑞希の講義終了後、付き添いを交代してもらい、瑞希が到着したら、俺はクリニックを出るところになっている。

時計をみると、講義終了時刻間近。

「もうすぐ瑞希が来るからな」

広田は俺の言葉に返事はするが、雑誌に夢中なようで、顔はこちらには向けてこなかった。

そしてしばらくの沈黙の後、

「そういえば、ずっと気になっていたんですけど」

広田は雑誌を閉じてラックへと返した。

「先輩たちは、どうして付き合っているんですか？」

とても唐突な質問だった。しかし広田の目はマジだった。

「どうしてって、何をいきなり」

俺は広田の意図が掴めず、どう答えていいのか戸惑った。

「最初の出会いとか、何で付き合うことになったのかとか、そういう話です」

要は俺と瑞希の馴れ初めの話ね。もう遠い過去の話のように感じるが、俺と瑞希は大学で知り合ったのだから、まだ二年も経っていない。

「うーん、何でだろうな」

俺の言葉に、広田は「ええ？」と少し呆れたような声を出した。

恋人との馴れ初めを覚えていないの？ というカンジである

「単純に初めて顔をみたのは、入学式の時。瑞希とちゃんと知り合ったのは、サークルの新歓コンパだ」

俺は当時の状況を振り返ってみた。

大学に入ったら何かをやりたいと考えていた俺は、入学式と同日に行われていたサークル発表会で写真サークルを知り、その後入部を希望した。

瑞希がやってきたのは俺よりも後、新歓コンパの直前だった。当

初は時期的に「コンパでタダ飯」狙いじゃないかと言われていたが、純粋に写真撮影に興味があったようで、コンパ後に正式入部となった。

コンパでの俺と瑞希は挨拶を交わす程度の関係でしかなかったが、どうも俺たちは「撮影対象のツボ」が似ているらしく、課題作品の撮影等で瑞希と一緒にすることが多かった。当然一緒に過ごす時間も、他のメンバーよりも多いわけで、色々なんやかんやしているうちに、いつの間にかこういうことになっていたのだ。

大体一回生の夏頃から付き合い始めたが、正直、正確な日はよく判らない。

「一応聞きますけど、付き合っているんですよね？」

今の言葉、付き合い始めてから今まで、周りの人間からそれこそ百万回言われてきた。

そしてその言葉に対する答えも、それこそ百万回言ってきた。

「ああ、付き合ってるよ」

いつ付き合い始めたとか、俺はそんなこと今となってはどうでもいい。

「いいんじゃないの。世界に一組くらい、俺たちみたいなのがないかも」

俺と瑞希は、いわば「始まりのない恋愛」。そんな俺たちの行き着いた答えが、これだった。

「あはは。さすがですね。でも一組ってことはないと思いますよ」  
俺の話に、広田は半ば呆れ顔で笑っていた。まあちよつとしたノロケ話だしね。

「何か羨ましいですね。私もやくカレシ欲しいなあ……」

広田はそう言いながら背伸びをし、俺から視線を外した。

「あれ？」

広田が待合室に設置されてあるTVに釘付けになった。

TVでは夕方の情報番組が流されており、画面の下には『あなたの健康チェック』というテロップが出ていた。

どうかしたのかと訊ねると、広田は画面に映し出されている、いかにも頭の良さそうなコメンテーターを指差した。

「あの人、この間大学病院で見たことありますよ」

そのコメンテーターはテーブルの前に「財部 司郎」と書かれたネームプレートが置かれていた。

「ああそうなんだ。よく覚えてるな。誰なんだ？」

「川上先輩のお見舞いに行った時、私お花を生けるのに外へ出たじゃないですか。その時、教授回診があつたみたいで、そこで見ました。名札見たら冗談みたいな名前だったので覚えています」

広田は当時の状況を説明してくれた。爆破事件があつた時のことだな。

「冗談みたいな名前……ああ「白くて大きな塔」のことね。」

実際は（たからべ しろう）と読むらしい。

「タミヤさんです」

「お前何歳だよ……。」

「ていうかTVに出ているってことは、けっこう有名な先生なのかな？」

「この先生のことかは判りませんが、大学病院の内科って県内ではトップレベルらしいですよ」

広田としばらくTVに観入っていると、俺を呼ぶ声が聞こえた。

声の主を探すと入り口の所に瑞希の姿を発見した。

「じゃ広田、付き添いチェンジな」

「はい、ありがとうございます」

俺は立ち上がり、思いつきり背伸びをした。

「あ、そうそう」

「はい、何ですか先輩」

一応釘を刺しておこう。

「さっき話をしたこと、瑞希には内緒だぞ」

俺はそういい残し、クリニックを後にした。

そして夜。

バイトが終わってからケータイを見ると、瑞希からメールが届いていた。

広田の足首は捻挫で、一週間もすれば良くなるそうであった。足首には簡易ギブスが施され、しばらくの間は不便かもしれないが、とりあえず骨折でなくてよかった。

## 第五章 爆破、ふたたび

翌日。

この日のワイドショーも、トップニュースで白川十未子の顔をデカデカと映し出していた。

しかしその内容は、昨日のものと少し違っていた。

昨日は爆破事件の現場に、「あの」白川が居合わせ、爆破は「自分を狙ったものだ」と主張。

そして今日は、その白川の元に一通の手紙が届いたからであった。その手紙には、こう書かれてあった。

「罪深き 偽善者に 裁きが くだる」

書かれてあった、というのは少し語弊がある。この手紙、一枚の紙に、新聞か雑誌から切り抜いた文字を貼り付けて作られたものなのだから。

TVの向こう側にいる白川は、昨日以上にヒステリックな様子でまくしたてている。正直、TVで放送できるギリギリの映像だと思っ……。

「じゃあ、あの爆弾って、やっぱりこの人を狙ったものだったのかな？」

俺と瑞希の状況は昨日と同じ。サークルの活動室で昼食をとりながら、先輩たちとTVを囲んでいる。

「さあな。どつかのアホが、悪戯でポストに入れたのかもよ」

お昼のワイドショーによると、この手紙は今朝ポストに入っていたのを、白川が発見したとのこと。差出人は不明で切手も消印もない。つまり誰かが白川宅の郵便ポストに、直接投函したということになる。

ただの悪戯だったら、これをやった人物はとんでもない暇人だと

思う。しかも状況が状況だけに、とても笑えない悪戯だ。

「どつちにしろタチが悪いな。あの爆破事件、確かに死人は出なかったけど、けっこう重い怪我をした人もいるんだから」

正直、ヘドが出る思いだ。こんなカンジじゃ、せつかくの昼食の味が台無しだ。

「つたく、新製品のパンだったのに。味がマズくなっちまうぜ」  
すると瑞希は何も言わず、俺にペットボトルの水を差し出してきた。

「それはTVのせいじゃないと思う。だからやめようって言ったのに。味噌メロンパンなんて買うの……」

この活動室へ来る前、俺はいつものようにパンと水を購入するため、売店を訪れていた。

すると売店の一番目立つ所に「魅惑の新製品」として、このパンが陳列されていた。

売店を訪れた人間の殆んどが、その存在を目の当たりし、引いていた……。

俺も最初は引いていた。しかし売店のオバチャンの、あの自身に満ち溢れた表情を見て、「ひよつとして……」と感ずるものがあり、一つ購入したのだった。

そして、その味は……、  
決して不味くはない。ただ、様々な風味が口の中でくんずほぐれ  
つ。

不味いというより、異次元的で不思議な味であった。  
というか既に「メロンパン」ではなかった。

「何か、見覚えのある所だな」

先輩の一人が俺と瑞希の間からTVを覗き込んでいた。

今TVに映し出されている映像、それは白川がどこかの住宅街でマスコミに囲まれているシーンなのだが、先輩は白川本人よりも、周囲の風景に目がいつているようだ。

「これって、藤野神社だろ？　ということとは……北川あたりかな？」先輩は画面に映り込んでいる鳥居を指差した。北川というのは藤野川市の町名なのだが、この地域出身ではない俺には、町名だけ聞いてもその風景は浮かんではこない。それは瑞希も同様で、どの辺りなのかよく判らないという表情であった。

「とにかく、戻ってきていたんですね。藤野川に」瑞希がそう呟いた。画面の端っこには「白川十未子さん宅前」というテロップが入っていた。

そういえば、以前俺が見た情報に、白川は度重なる嫌がらせにより引越し、元々住んでいた家は取り壊され、現在は空き地になっていると記されていた。

白川は藤野川を離れ、別の地域でひっそりと暮らしているとされているのだが、最近になって、再び藤野川へ戻ってきたのでは？　というのが先輩の見解であった。

確かに、爆破事件の際大学病院にいたのだから、この周辺に住んでいることは容易に推測できる。しかし、いくら以前住んでいた中野地区から距離があるとはいえ、本人にとって曰くのある藤野川に住んでいたことは、ちよつと意外であった。

「しかし何でまた藤野川に……」

「さあな。ただ、嫌がらせがひどくなつて中野地区から出て行った時、あれって殆んど夜逃げみたいなもので、それから白川がどこへ行ったのか全然判らずじまいだったんだ。案外、ずっと藤野川にいたのかもな」

先輩は苦笑いを作り、次の講義の準備があるからと、活動室を出て行った。

その後、俺と瑞希は無言で並び、TVを観ていた。

ふと瑞希が俺の方を向いた。俺の顔をじつと見つめている。

「ねえ、壮介君」

「ん、何だ？」

顔は動かさず、視線だけを瑞希の方へ向けた。

「今、壮介君が考えていること、当ててあげようか？」

瑞希の問いに俺も乗っかってみることにする。俺は無言で頷いた。  
「この白川さんの所へ行ってみよう！　でしょ？」

……………

某クイズ番組のように、答えを溜めに溜めて、

「……………正解！」

俺のことが何でも判る、瑞希が凄いのか。それとも、考えていることがすぐ顔に出る俺がダメなのか。

どちらにしても、俺たち二人の間でしかできない芸当だ。

「よく判ったな瑞希。よし正解した豪華商品として、」

「いらないよ、ポン酢メロンパンなんか」

瑞希の言葉に、パンの入った袋へ伸ばそうとしていた俺の手が止まった。

「もう、いらぬなら買わなきゃいいのに」

スミマセン。ウケ狙いのため、味噌メロンパンの横に並んでいた、見た目と匂いかなりショッキングなパンも買ってしまいました。

岡本瑞希。さすがは俺のカノジョ。俺の考えていることは全てお見通しのようである。

全講義終了後、俺と瑞希は藤野川市の北川地区へと向かった。

凡その場所は大学から自転車走らせて三十分程。隣の市といっても、羽音市も藤野川市も規模の大きな自治体ではないので、自転車でも悠々と周ることができる。

正確な場所は俺も瑞希もよく判らなかつたが、先輩から近辺にあるという藤野神社までの行き方を教えてもらった。

俺たちは何度か自転車を止め、先輩に教えてもらった住所を確認した。頼りは電柱や民家に張られている番地だ。また通行人に藤野神社までの道のりを訊ねたりもした。

そんなこんなで、道の向こうに、藤野神社らしき鳥居が見えてきた。

「あ、壮介君、あそこ」

藤野神社の鳥居前へ来た時、瑞希が指を差した。

その先には、閑静な住宅街には不自然な人だかりができていた。

「あそこだな」

俺たちは自転車を降り、人だかりの方へと向かった。

人だかりはある古い民家の周りにできていた。表札は上がっていないが、ここが白川の自宅なのは間違いないようであった。

周囲の人間を見ると、カメラや腕に腕章を付けた記者たちの他、野次馬らしき人々も数多く見られた。

「つたく、暇人かよ」

「壮介君、私たちも同じだから」

……スミマセン、そうでした。

「ところで、白川のオバチャンは今何してるんだろ？」

俺は野次馬らしき人たちに、状況を確認してみることにした。

例の手紙が届いたということで、TVカメラの前でまくし立てていたのは今日の午前。それから自宅から一歩も出てきていないのである。報道関係の記者はずっと家の前で張り付いているようだが、その他の野次馬は少しの時間立ち止まるくらいのものであった。つまり、ずっとここで待っていれば、いつかは白川の姿を拝めるであろうが、それはいつかは判らないということ。

できればその顔を拝みたいが、俺も瑞希も、ここにずっと張り付いて待つているほど必死ではない。

「行こうか」

現在の状況を確認した俺は、瑞希の一言で、その場を離れようとした。

その時、

「おう、こんな所で何してるんだ？」

一台の原付が俺たちの方へ近付いてきた。錆だらけの汚いヘルメットに、何故か着ている白衣。とつつぁんである。

「いやあ、あれですよ」

俺は集まっている野次馬の方を指差した。

「ふーん、暇だね君たちも」

俺が指差した先を見て、とつつあんは俺たちが何故ここにいるのか理解したようで、苦笑いを浮かべていた。

「でもずっとここで待っているほど物好きじゃないんで。俺たちもう行きますよ」

俺は瑞希に合図して、自転車に跨った。

「そうか……。しかし、」

とつつあんは再び白川宅前の人だかりに視線を送っていた。

「十五年前の事件の時も、こんなだったな。白川十未子という人も、人生の半分を世間監視され続けていた。そう思えば、少々気の毒ではあるな」

とつつあんにしては珍しく、シリアスな表情をしていた。俺は十五年前の事件をリアルタイムでは知らないから、白川の半生というものに感情移入は出来難い。しかしとつつあんは事件をリアルタイムで知っているし、また白川とは同年代。思うところのひとつもあって、おかしいことはないと思う。

「それじゃ、俺たちはこれで」

「ああ、はい。私もそろそろ行きます。娘のお迎えに行かなくてはならないので」

とつつあんはそう言い残し、原付のエンジンをかけ、白衣をたなびかせ颯爽と走り去っていった。

それを見送った俺たちも、自転車のペダルに足をかけ、白川宅前を離れた。

## 第六章 貴方のお名前、何てえの？

白川に脅迫状が届いてから一週間が経過した。

今のところ、白川の周囲に変わったことはない。白川宅は相変わらず記者たちに取り囲まれているが、以前と比べカメラの前へ出てくる回数は減っていた。

本人も警戒しているだろうし、周りを何人もの人間に囲まれているのだから、そう易々と手は出せない状況。

脅迫状が届いた頃は、けっこう騒がれていたが、今となっては、やはり悪戯だったのではという見解が多数を占め始めていた。

講義終了後、俺と瑞希はレポート作成に必要な資料を探すため、市立図書館へと向かった。

一応大学にも図書館があるのだが、蔵書量がそれ程多くないため、目当ての資料が見つからない時は市立図書館へと出向くことがある。大学からは自転車で十分程度の所にあり、羽音の学生もちらほら見ることが出来る。

俺はとつつぁんに野暮用があったので、瑞希は先に図書館に向かつてもらい、場所取りを任せておいた。

瑞希に遅れること三十分、ようやく大学を出発。用事はすぐ済むはずだったのだが、とつつぁんの長無駄話に捕まってしまった……。大学を出たところで、俺は瑞希にメールを送信し、これから向かうことを伝えた。

「あら、こんにちは」

自転車を走らせ、図書館の近くに来たところで、見知った顔と出会った。

佐野クリニックの文子さんである。ナース姿ではない文子さんは、けっこうレアだ。

俺は自転車を止め、軽く会釈をした。

「ども。こんなところで会うなんて奇遇ですね。図書館ですか？」  
文子さんの自転車の前カゴには、妙に膨らんだトートバッグが入  
れられており、また文子さんには珍しく、リュックサックを背負っ  
ていた。どちらにも本が入っているのだろう。

「うん、そうよ。新谷君もこれから図書館？ さつきカノジヨさん  
見かけたわよ」

「あ、はい。レポート書くのに、図書館で待ち合わせしているんで  
す」

そんなカンジで俺と文子さんは、他愛のないことを話していた。  
しかし、俺は図書館に瑞希を待たしている身だし、文子さんもこ  
れから午後診の準備だし、お互いここで長く時間を潰せなかった。

俺は適当に話を切り上げて、その場を離れようと思った。文子さ  
んも自転車から降りず、急いでいる様子だったので、話を切り上げ  
てくれた。

「さようなら、また今度」

お互い、そう言い残して別れようとした。

しかし、文子さんとすれ違った時、あることに気付いた。

「あ、文子さん、リュック開いてる！」

文子さんのリュックは、ファスナーが半開き状態となっていて、  
中の本が落ちかかっていた。しかし文子さんはそのことに全く気付  
いていない様子であった。俺も何度か叫んだが、俺の声に気付かず、  
そのまま走り去っていった。追いかけようかと思っただが、もう大分  
瑞希を待たせているので、仕方なく図書館の方へと向かった。

今度会ったら笑いのネタにしてやろう……。

しかし、文子さんは図書館からああいう状態だったのだろうか？  
もしかして道に何か落としていないのだろうか？

気になったので、俺は図書館に到着するまで、道に何か落として  
いないか、一応注意していた。

俺が図書館に到着するまでの間、さすがに本は落ちていなかった  
が、数枚の書類が落ちていた。

それは病院に関する資料のようで、幾つかの病院の案内図や見取り図・住所や電話番号が記載されていたが、どここの病院かまでは判らなかつた。

おそらく文子さんが落としたものだろう。仕事で必要なものかもしれないので、後でクリニックへ届けに行つてこよう。

俺は拾つた書類を自分のカバンにしまい、図書館の中へと入つた。

「壮介君、これ年表のコピー」

「おう、サンキュ」

大学のレポートというのは、作成が非常に面倒くさい。単に、一つのテーマに対し自論を主張しているだけでは、何の評価も得られない。それを裏付けるための資料や他の人が書いた論文を引用・添付しないといけないのである。うちの学部の教員陣は「裏付け」に関してはかなり舌鋒鋭く、特にとつあんは斜め四十五度から突っ込んでくるカンジなので、いいかげんな気持ちでやると思わぬ火傷をしてしまう。

俺は基本的にキャンパスライフをエンジョイしていると思つてゐる。しかしこのレポート作成がやってくると、とても気が滅入つてくる。しかも今回は必修科目でのレポートなので逃げる事ができない。

瑞希はレポート作成に関していえば、俺よりも遙に要領がいいので、どんな無理難題が出ても、必ず及第点を取つていた。

「よし、これで何とかかなりそうだな」

そんな瑞希のおかげで、今回のレポート、何とかメドがついた。まあ色々突っ込みどころはあるかもしれないけど、少なくとも「不可」をくらすことはないだろう。我がカノジヨ、瑞希に感謝だ。

「壮介君、ゴメンちよつと待つてね」

瑞希はケータイを持って出口の方へ歩いていった。律儀にも図書館内では電源をオフにしている。

残された俺は、とりあえず資料等をカバンにしまった。その時、

図書館前で拾った数枚の紙が目に入った。

「帰りに届けに行かなきゃな」

俺はカバンを閉め、瑞希が戻ってきたらすぐ出発できるよう、帰る準備をしておいた。

「でも、その前に一つ……」

俺はカバンを置いたまま、司書受付へ向かった。

「え、壮介君何やってるの？」

戻ってきた瑞希が、俺の姿を見て目を丸くしていた。

俺の周りには新聞が何十部も広げられていたからだ。

「何をつて、見ての通りだ」

「見ても何が何だがさっぱり……」

まあ、そうだろう。この絵ヅラだけを見て、今俺が何をやっているのか判るヤツがいたら、そいつは絶対に俺の心が読める！

「あれだよ、十五年前のたこ焼き事件」

それを聞いた瑞希は、さらに目を丸くした。

白川に脅迫状が送りつけられてから一週間。一向に何の動きもないが、俺は事件についての興味を失ったわけではない。巷では悪質な嫌がらせではないかという説が大勢を占めているが、俺は今回の騒動について、十五年前に起きた事件が関係しているように思えるのだ。

最初は単なる好奇心。それを突き進んでいくと、とんでもない深みへと入り込んでしまう。

そして誰も辿り着けないようなところまで……。

「ここ、読んでみるよ」

俺は瑞希に、ある新聞を手渡した。

「え、これ……」

新聞を受け取った瑞希は、さらにさらに目を丸くした。瑞希の目はどこまで丸くなるのだろうか？

俺が瑞希に渡した新聞。それは十五年前、八月十一日の夕刊。

事件翌日の夕刊である。

俺は社会面のある部分を指で差した。瑞希は俺の指先を目で追った。

「えっと、十日夜、藤野川市中野で催された夏祭りで、集団食中毒……」

社会面の隅、僅か三行の記事。そのスペースは、同じく社会面に掲載されている四コマ漫画にも負けている。

「そしてこれが、八月十二日朝刊」

今度はどこに何が書かれてあるか指し示す必要はない。一面にデカデカと「毒物混入」という文字が躍っていた。

「うん、すごい騒ぎになっていたみたいだね」

確かに、この日以降、しばらくはこの事件の記事が一面を飾っていた。当時、この事件に対する関心度を伺うことができる。

「でも、一つ気になることがあるんだ」

俺は他の八月十一日夕刊と、翌十二日朝刊をいくつか広げてみた。「見ろよ。十一日の夕刊では、どの新聞社もこの事件の第一報を『集団食中毒』って報じているんだ。でも、翌日の朝刊では『毒物混入事件』に変わっている」

これが一体何を意味するのか？

「つまりこの事件って、最初は食中毒として扱われたってこと？」

この新聞記事の移り変わりをみると、多分そうであろう。最初は単なる集団食中毒騒動、社会的にさほど重大な問題ではないと思われていた。だからこんなに扱いが小さいのだ。

しかし、それが毒物混入事件ということが判り、扱いが一変したのだろう。

「でも、それってちょっとおかしいんだ」

「え、どういうこと？」

俺は瑞希から新聞を受け取り、手元で広げてみせた。

「食中毒と毒物による中毒。この二つは似ているけれど、発症の仕方は全然違う。大体食中毒ってのは、痛んだものを口に入れて、何

日かの潜伏期間があつて発症するものなんだ。一方毒物が混入していた場合、大体は口に入ればすぐ発症する。そして今回の事件、みんな夏祭りで出されたたこ焼きを食べて発症している。だから潜伏期間がないんだ」

ここまでくると、瑞希もピンときたようである。

「じゃあ、詳しい人なら、それが食中毒なのか毒物による中毒なのか、状況を考えたら判るんだ」

「ああ、そういうこと」

しかし、ここで一つ疑問が出てくる。何故そのような報道がなされたのかということである。

はつきり言つて、これらの違いは専門家でなくても判りそうなこと。一社の新聞が第一報をこう書いてしまつても、まあ不思議な話ではないが、八月十一日夕刊で第一報を伝えた新聞が揃つてこのよ  
うな記事を書いていたことは、ちよつと信じられなかった。

八月十一日の夜、事件の背景に一体何があつたのだろうか……。

ああ、また新たな謎が増えてしまった……。

図書館を出発した俺たちは、文子さんが落としたと思われる書類を届けるため、佐野クリニツクへと向かった。

「壮介君、まだ開いてないみたい」

佐野クリニツクに到着すると、入り口には『休憩中』と書かれた  
ブラカードがぶら下がつていた。クリニツクの午後診は五時半から  
時計を見ると五時十分前。もうそろそろ待合は開くはずだ。

俺は試しに入り口のドアを引いてみた。すると鍵はかかつてい  
な  
かった。

「こんにちは」。文子さんいますか？」

俺は扉を開け、名前を呼んでみた。

「あら、新谷君？」

すると待合室には文子さんと、見覚えのある後姿があつた。

「あ、新谷君。こんにちは」

ショートカットの茶髪頭がこちらに振り向いた。間違いない、大学の演劇部部长だ。俺の後ろにいた瑞希も演劇部部长に気付き、お互いに挨拶を交わした。

「何してんの？　どっか調子悪いの？」

「年下のクセに相変わらずダメ口ね。うちの部じゃ許されないわよ」この演劇部部长、大学三回生で一年浪人しているから、俺より二つ上。しかし、背が低く童顔のため、どうも「先輩」というカンジがしない。よって、敬語は「自然と」出てこない。

「全くもう……」

しかし、同じ文化系サークルの繋がりから、度々一緒に活動することがあるので、俺たちとは見知った関係。だから、この程度のことではいちいち目くじらは立てない。

苦笑いしている演劇部部长の横で、文子さんは一冊の本を膝に置いて笑っていた。

「何ですか、それ？」

瑞希が本の存在に気付き、文子さんに訊ねた。

「ああ、これ」

文子さんは俺たちの方に本を向けてきた。それは芝居の台本のようであった。

「文子さん、芝居でもやるんすか？」

「ハハッ」

俺の問いかけに、文子さんではなく、演劇部部长が割って入ってきた。

「ていうか……何だ、人を小バカにしたような今の笑い方は……」

「文子さんは、羽音大学演劇部のOGなんだよ。新谷君知らなかったの？」

俺と瑞希は同時に驚きの声を上げた。文子さんが羽音のOG！？

「え……、ちょ、ちよつと待てよ。じゃあ何で今看護師やってんだよ？」

うちの大学に看護系の学部はなかったはず。なのに、何故看護師？

「もしかして、無免？」

盗んだ注射器持って走り出したりするのだろうか？

「アーホ」

演劇部部长に冷たく一蹴された。……何かイラツとくる。

「その言葉、壮介君が言われているのって、けっこう新鮮かも」

新鮮もクソもねーよ！

「フツツ。OGっていうのは、ちょっと違うかもね」

文子さんは、俺に台本を手渡してきた。

「これは？」

文子さんから手渡された台本。それは少々年季が入っていた。

「私は元羽音の学生で、その時演劇部に所属していたの。でも二回  
の時に中退しちゃった」

「え、どうしてですか？」

「それは……見ての通り」

文子さんは瑞希の問いかけに、笑顔で両手を広げ、俺たちの方へ  
白衣を強調してきた。

「看護師になるため……？」

すると文子さんは、笑顔で人差し指を立てた。

「ちよつと、思うところあってね。別に大学が嫌になって辞めたわ  
けじゃないわよ」

「へ〜、知らなかったな」

俺は文子さんから手渡された台本に目を落とした。

「それはね、私が学生時代に出演した芝居の台本よ。前にね、探し  
てほしいって部長さんに頼んでいたのよ」

タイトルの書かれた表紙をめくると、一ページ目に出演者一覧が  
記載されていた。

「なんじゃこりゃ」

俺は思わず顎を突き出してしまった。一覧に書かれてある名前が、  
ちよつと変わっていたからである。

マウンテンボン・アキラ

フラワーデン・チサト  
スターヤ・マモル

……  
こんなカンジである。どんなセンスで、この名前をつけたのだからか？

「ああ、それね。変わっているでしょ」

ページの内容に気付いた演劇部部长が身を乗り出してきた。

「うちの演劇部はね、芝居に出演する際、自分の本名をもじった芸名をつけることが決まりになっているの。でないと、出演者一覧が漢字ばかりになって、つまらないでしょ」

観る側がそこまで求めているかどうかは別として、まあ面白い趣向ではあると思う。

「ちなみに文子さんは何て呼ばれてたんすか？」

すると演劇部部长が指を差してきた。

アンダーソン・アヤコ

他の芸名に比べ、文子さんの芸名は、割と普通だった。勿論「こ」の中では普通」ということである。

「へえ、何かカッコいいですね」

横に目をやると、何に対して喰いついたのか、瑞希は目を輝かせていた。

「あなたたちにも、つけてあげようか？」

目を輝かせている瑞希を目の当たりにした演劇部部长が、そう提案してきた。

そんな簡単にできるようなものなのか……。

「そうねえ……。岡本さんは……。ヒルボン・ミスキ！」

ヒルボン……？ 昼にBON！……？

「そして新谷君は……。ニューヤ・ソースケ」

演劇部部长よ、人に人差し指を向けるのはやめなさい……。てゆーか何だよ。その訳の判らない芸名は！

「私ヒルボン！ 壮介君ニューヤ！」

訳が判らない俺の横で、瑞希が異常に盛り上がった。ちょっと、引く……。

そんなくだらない話をしているうちに午後診の時間となった。別に診察を受けにきたわけではない俺たちは、クリニックを出発した。芸名をもらった瑞希は、出発してからもテンションが上がりはなして、しかも、

「これから壮介君のこと、ニューヤって呼んでもいい？」

などと提案してきたため、これ以上調子に乗せないために一発頭突きを喰らわせておいた。

ところで、俺は今日何をしにクリニックへ赴いたのだろうか？

……………

あ、文子さんが落としたと思われる書類を届けるためだった……。

## 第七章 壮介、走る

広田からメールが届いた。

今日、足のギブスが取れたのだそうだ。ということとは、今日佐野クリニックへ行ったようだが、俺たちとは入れ違いになったみたいだ。

そして広田からのメールは、それだけではなかった。その時にクリニックであった、「あること」について書かれていた。

『待合室で順番を待っていたら、急に文子さんがやってきて、乱暴なカンジで待合のTVを消しちゃったんです。何だかイライラしているみたいで、ちょっと怖かったです』

内容だけみれば、だから何だというもの。俺は広田に、それがどうしたのかと返信をした。

メールを打ち終わった後、俺は今日の講義で出された課題に目を通そうと思い、カバンを開けた。

最初に目に飛び込んできたのは、例の書類であった。

「しかし、これホントに文子さんが落としたんかいね……」

俺はカバンから書類を取り出し、改めて目を通してみた。それはどこかの病院についての資料。

一通り目を通したところで、ケータイが鳴った。広田からのメールであった。

『いや、私にもよく判らないです。因みにその時やっていたのは、先週先輩と一緒に行った時流れていた番組の、タミヤさんが出ているコーナーでした』

大学病院の教授が出ている番組のことね。ていうか、タミヤさんじゃねーよ！

その後、俺は広田の話に、テキトーな返事（というか突っ込み）を送りながら、書類を眺めていた。

そして、その中の一枚、どこかの病院の院内案内図と思われるも

のに目がとまった。それはとても細かいレイアウトで、全てに目を通していると、思わず目元を押さえてしまいそうになるものなのだった。その中にある名前を見つけた。

「財部……」

案内図の、ある部屋の並びには、番号とその部屋の主の名前が表記されていた。この辺りはおそらくセンセイ方の研究室か何かなのだろう。

そういえば、広田の言っている「タミヤさん」て……。

俺は広田に電話をかけた。程なくして、電子音は広田の声に変わった。

「なあ広田。一つ確認したいことがあるんだけど」

俺が確認したかったこと。

それは、「タミヤさん」の本名は財部だということ。

そして、件の番組に、財部が出演していたのかということ。

広田の答えは両方とも「Yes」だった。

ホントに「Yes」って言った。何故、英語……？

翌日、俺は昼休みにとつあんの部屋を訪れた。

アポなしの訪問に、とつあんは少し驚いていたが、そこはとつあん。いつものように湿った煎餅を取り出し、迎えてくれた。

「で、今日は何の用事だ？」

椅子に座り落ち着いたところで、俺は今日ここへやってきた用件を伝えた。

「例の事件についてです」

俺の言葉にとつあんは少々目を丸くしていた。まだそんなことに首を突っ込んでいるのかというカンジであった。

「十五年前の事件、自分なりに色々調べてみました。その中で、一点不思議に思うことがあります。この事件、第一報が何故食中毒だったのかということ」

俺の言葉に、とつあんは目をカッと見開いた。これはとつあ

んが、何か考えごとをしている時の仕草である。

しばらくの沈黙があつて、とつつあんは口を開いた。

「私も当時のことはうる覚えなのだが、確かそもそもの第一報は翌朝のTVニュースだった。その時は集団食中毒という報道がなされていたのだが、それが夕方になつて毒物混入に変わつていたな」

とつつあんはもじやもじやの頭をポリポリと掻きながら、当時のことを思い出していた。

「それで、その時どういう発表がなされていたのですか？」

「どういう発表？ ……最初は保健所と病院が出ていたな」

病院……その病院とは？

「その病院つて、藤野川の大学病院ですか？」

俺の質問に、とつつあんは頷いた。

「今はそうでもないが、十五年前にこの辺で大きな病院といえば、あそこくらいだったからな」

とつつあんは当時を振り返り、そう答えた。

「ということは、後になって、食中毒を毒物混入としたのも……」

「ああ、大学病院だ」

俺が言い終わる前に、とつつあんが答えた。

そうか……、

見えてきたぞ。病院爆破事件の隠された意味、そして犯人の狙いが。

とつつあんは立ち上がり、本棚から一冊の雑誌を取り出し、俺に手渡した。

それは以前とつつあんに見せてもらった、十五年前の事件について書かれた記事が掲載されている、当時の雑誌であった。

「それ、貸します。貴重なものだから、決して汚さないように」

「あ、すみません。ありがとうございます」

俺もこの雑誌、もう一度目を通しておきたかった。もう一度事件当時のことを確認しておきたい。

そしてそろそろ昼休みが終わりに差し掛かってきたので、俺はと

つつぁんに礼を言い、研究室を後にした。

研究室を出る直前、俺はふと「あること」を思い出し、とつつぁんに訊ねてみた。

「そういえば、前に白川十未子の旦那とちょっとした縁があるって言ってたけど、それってどんな縁だったのですか？」

俺としては軽い気持ちで訊ねてのだが、とつつぁんはというと、またしても目をカツと見開いたが、今度は視線を落とし、押し黙ってしまった。

そしてとつつぁんの口が開いたのは、午後の講義開始五分前のことであった。

そして、午後の講義が開始された。

しかし俺は講義には出ず、「あること」について調べるため、大学の図書館と市立図書館を行ったり来たりしていた。

途中、瑞希からメールが届いたが、俺の居場所については答えず、代返だけ頼んでおいた。瑞希にしてみれば、訳が判らないであろう。

そして日が暮れる頃、それまで俺が調べてきたことを積み重ね、練り上げて、一つの仮説を導き出した。

ただ、この仮説を証明するためには、「ある人物」に行動を起こしてもらわなければならない。

その「ある人物」というのは、勿論大学病院爆破事件の犯人。

こればかりは、犯人が動いてもらわなければ話にならないので、ひたすら待つしかなかった。

そして、俺が仮説を導き出してから二日後、遂に犯人が動いた。

白川の元に、再び脅迫状を送りつけてきたのだ。内容は以前に送られたものと、ほぼ同じ。

一つ違ったのは、「二、三日中に」と、以前よりも具体的な期日を決めてきたこと。

報道陣は白川にべったりと張り付いている。前回と打って変わり、

白川はTVカメラの前に顔を出してこなかった。

今回、犯人は確実に行動を起こす。

そして今回で、ケリがつく。つけてみせる！

## 第八章 深層と、真相

ある日の夜。

俺と瑞希は「ある場所」の前に立っていた。時刻はもうそろそろ深夜の時間帯。俺たち以外の人影はない。

「壮介君……」

瑞希が俺の手をギュツと握ってきた。夏が過ぎ、もうすぐ冬の足音が聞こえてきそうな季節の夜。上着を着込んでいなければ肌寒さを感じる。

しかし、瑞希が俺の手を握ってきたのは、寒いからではない。

それは俺も感じている、得体の知れない不安から……。

事はもう始まっていた。

だから、俺は行かなければならない。

ある人物……犯人の暴走を止めるため。

怖い。正直言って怖い。相手が何をしてくるのか、全く判らない。でも、でも……俺は！

俺は瑞希の身体を抱きしめた。瑞希の身体が、俺の身体の中へ入ってしまうかもしれない程、ギュツと抱きしめた。瑞希は全身の力を抜き、俺の胸に顔を埋めていた。

俺は、瑞希の身体を引き離れた。見ると瑞希の頬は涙で濡れていた。

そして瑞希は、俺の上着の袖を掴み、離さなかった。

「やっぱり、私も行く」

正直、瑞希と一緒にいたかった。瑞希と一緒になら、どんな怖いことでも乗り越えていけるような気がする。

でも、それだけはできない。

俺は瑞希を危険な目に遭わせるわけにはいけない。

それに、今回瑞希には重要な役割がある。

俺に万が一何かあった時、警察へ通報してもらわなければいけない

いのだ。

「アーホ、泣くなつて。大丈夫だよ、きっと」

俺は瑞希の頬を指で拭いてやった。

「全て上手くいく。上手くいくようにするために、俺はここに  
んだ」

俺は瑞希に背を向けた。

「じゃ、行ってくる。頼んだぞ、瑞希」

俺はもう、振り返らなかつた。

一歩 一歩 私はずすむ

今日を最後に 私の思いは 完遂する

この日を どれだけ どれだけ 待ち望んだことか

あの日から あの子を失ってから 私の時間は とまったまま

でも あいつは 今も尚 のほほんと 生きてやがる

あの子の命を奪っておきながら この太陽の下 生きてやがる

許せない ゆるせない ユルセナイ

でも これで やつと楽に なれる

私も あの子も

これで終わる……

「どこへいくのですか？」

えっ……！

俺は「ある人物」の前に立っていた。

「ある人物」は胸にダンボールを抱えていた。そして額に汗を浮かべ、俺の登場にかなり動揺している様子だった。

「正直、あなたとはこんな所で、こんな形で会いたくはなかったです」

これは紛れもない、俺の本音であった。

「ある人物」はダンボールを胸の前で、ギュツを抱え締めた。隠しているつもりなのだろうか。

「どうして……ここに……？」

搾り出すような声で、俺に問いかけてきた。額から零れる汗が、ダンボールの上にポタポタと落ちていく。

「あなたを止めるために、ですよ。文子さん」

ダンボールを抱え狼狽する「ある人物」……それは文子さん。

俺たちは今、佐野クリニックの前で対峙していた。

「行かせませんよ、大学病院へは」

「は……？ 何を言っているの？」

とぼけているつもりなのだろうか。俺の言葉に、文さんは口元を歪めた。

俺の登場に少なからず動揺しているようで、その声はかすれていた。

「そのダンボール、中身は爆弾ですか？」

俺の言葉に、逐一過敏に反応する文子さん。ダンボールを隠しているつもりなのか、上体を捻り俺に背を向けた。

俺は一步、文子さんへ近付いた。

「何!」

文子が俺に対して放った言葉。しかし、その声は俺の方を向いていない。

俺と目を合わせることができないようだ。

「どうして……どうして?」

文子さんは自身の足元に向かって、かすれた声で独り言のように呟いている。

「最初は、ちょっとしたきっかけでした」

俺はもう一步、文子さんに近付いた。

「アンダーソン」

文子さんには、俺の口から放たれた言葉が意外なものだったのだろう。捻った上体から首だけを動かし、視線を俺に向けてきた。

「これは文子さんの、演劇部時代の芸名ですね。演劇部の芸名は、ある法則によって決められている。そうですね?」

俺の問いかけに、文子さんからの返答はない。しかし、その瞳の色が凶星であることを物語っている。

「文子さんがアンダーソン。俺がニューヤ。瑞希がヒルボン。一見デタラメだけど、これには英語と日本語を利用して形成されている。例えば俺、新谷の『新』。これを英語にするとNEW。そして新谷の『谷』。『谷』を音読みすると、『ヤ』。これらを繋ぎ合わせてニューヤになったんですよね」

因みに瑞希は、岡本の『岡』を『丘』に置き換え、英語でHILL。そして『本』の音読みである『ホン・ボン』を繋ぎ合わせ、ヒルボンとなったのだ。

そして……、

「アンダーソンを『アンダー』と『ソン』に分けます。英語のUNDERは日本では一般的に『下』という意味で認知されている。そ

して『ソソ』というのは『村』の音読み。つまり……」

俺はもう一步、前へ出た。

「文子さん、あなたの本名……否旧姓は、下村文子。裏付けは昔の学生名簿で取らせてもらいました」

「……そ、それが何だっというの？」

文子さんは何とか冷静を装おうとしているのが、俺には手に取るように判った。

しかし、額に浮かぶ汗と、かすれた声は誤魔化すことはできない。

そう、最初はちよつとした好奇心。

それを追いかけていると、

いつの間にか、とんでもない深みにまで辿り着く。

「文子さん……。あなたについて、できる範囲で、色々調べさせてもらいました」

勿論失礼は承知の上。俺は大学に保管されてある過去の記録等から、下村文子という人物へ行き着くことができた。

「当時文子さんの所属していたゼミの教授とお話することができました。文子さん、あなたは生まれはこの辺りではないですが、母方の実家が藤野川の中野地区にありますね。そして学生当時、そこから大学へ通っていた。そうですね？」

俺の問いかけに、やはり文子さんは無言。

しかし俺は言葉を続ける。

「文子さん、あなたには歳の離れた弟さんがいましたね」

「弟」という言葉に、文子さんの瞳が揺らいだ。夜の闇の中でもそれははつきりと確認できた。

「そして、その弟さん……大和君は、もう亡くなっていますね。十五年前に」

十五年前……やはり、今回の事件はそこから始まっていたのだ。

「あの日、中野地区で夏祭りがあるからと、実家から弟さんと呼ん

だのですよね？　そして、あの事件に巻き込まれた」

文子さんが、呼んだ。だから殺された……。

俺はあえて、そういう言い回しを使った。

「弟さんを失った悲しみ、それは俺にはとても計り知れない。とて  
もとても、残酷な現実だったでしょう」

その時、文子さんの瞳が俺の顔を捉えた。

「な、何を根拠に……」

言葉は短い。しかしそれは文子さんのできる、精一杯の反論だっ  
たのだと思う。

「最初は、ちよつとしたきっかけですよ」

俺は人差し指を立ててみせた。

「俺は文子さんの旧姓が、下村だということを知った。実は俺、文  
子さん以外で下村という姓の人物に会ったことはありません。でも、  
俺は文子さん以外で、下村の姓を名乗っている人物を、あと一人知  
っています。それが大和君でした」

俺は持っていたカバンから、一冊の雑誌を取り出した。

これはとつつあんが持っていた事件当時の雑誌。これに掲載され  
ていた事件の死者一覧に、下村大和という少年の名前があったの  
だ。

二人の「下村」……。果たして偶然なのだろうか？

「文子さん、あなたは十五年前、二回生の時に大学を中退していま  
すね。それは、看護士を目指すため、そうですね？」

俺の問いかけに、文子さんは何も返してはこなかった。尤も、俺  
も返答を期待していない。

「あなたは十五年前の、あの日、あの夏祭りにいた。そして、あな  
たはそこで、目を覆いたくなるような地獄絵図を見た」

毒物が混入したたこ焼きを食べ、血の混じった嘔吐・白目を剥い  
て、苦しそくに地面をのたうち回る男女・子供・老人……。

もし人類が滅亡するならば、みんなこうなつて死ぬのだろうとい  
う瞬間の光景が、目の前にある。

その時、文子さんは大きなため息をついた。

「どうすることも、できなかつた……。悔しかった……」

目の前で自分のよく知っている人たちが、苦しんでいる。でも、自分は何もできない。何をどうしていいのか判らない。

あの時の文子さんは、俺には想像もできないような絶望感に襲われていたのだろう。

「大学では演劇以外、何も考えずにいた。就職とか将来の夢とか……。あの日、私は誰も助けることができなかつた自分を恥じた。だから私は大学を辞め、看護師を目指したの。もう誰も見殺しにしないために……」

俺はもう一步、文子さんへ近付いた。

だんだん目が慣れていった。

その時、文子さんの頬が濡れていることに気付いた。

十五年前、文子さんの人生は大きく転換した。

しかし、問題はその後。

そこから、どう道を曲がりくねって、今文子さんは爆弾を胸に抱えているのか？

俺がぶち当たったのは、もし文子さんが犯人と仮定した場合、動機は何なのかということ。

言いかえると、その爆弾は、一体誰のためのものなのかということ。

「俺が今回の件で、疑問に思ったこと。それは、犯人は本気で白川十未子を狙っていたのかということなんです」

あの病院爆破事件、動機を毒物で何人も住民を殺した（かもしれない）白川に対する恨みとするのは無難であるし、白川本人も、あれは自分を狙ったものだと思っ込んでいます。

しかし、それにしても、リスクが高すぎる。

爆弾は確かに殺傷能力が高い。しかし、それはあくまで対象者が一定の場所で留まっていればの話。何の拘束もされていない特定の

人物を、多くの人が集まる場所の中で狙う場合、爆弾は確実性に欠ける。

事実、あの爆破事件で死者は出ていない。

「あれは白川を狙ったものではない。言うなれば、囷の爆弾」

俺はさらに一步、文子さんへと近付いた。

「な、何を……？」

一步一步近付いてくる俺に、文子さんは鋭く警戒し、ダンボールを強く締め付けた。

「白川宅に届いた脅迫状。あれも囷ですね。世間の目を白川へ向けさせ、犯人が本当に狙っている対象への注目を逸らさせるために」

「何なの？ 何が言いたいのか！」

文子さんは声を荒げた。俺の位置から、文子さんの心臓の音が聞こえてきそうなくらいだ。

「文子さん、あなたが狙っているのは大学病院ですね」

そして、俺は突きつける。

「もっと具体的に言うと、大学病院の財部教授ですね。あの事件を最初、食中毒として処理してしまった」

文子さんの方から、グシャツという音が聞こえた。

強く締め付けすぎて、ダンボールの側面がひしゃげていた。

俺はこう推測する。

十五年前の、あの事件が起きた夜……。

事件発生後、たこ焼きを食べた数十人の人々は、次々と救急車で運ばれていった。

そして一番多くの人々が搬送されたのが、藤野川の大学病院。

そこで対応にあたったのが、当時まだ一介の医師だった財部教授。財部教授…… 否財部医師は、若いながらも非常に優秀な医師であると、当時から評判であったらしい。教授にも好かれ、将来の助教・教授候補とも言われていた。

つまり、財部という医師は、将来を約束され、周囲からもチャホ

ヤされていた存在であった。

しかし、そこに落とし穴があった。

必要以上に周りから持ち上げられた財部医師は、自分の医師としての力量を過信してしまっていた。

例えば……どんな患者が来ても、自分は一目で最善の処置が浮かんでくるとか……。

そのような慢心で、夏祭りの会場から運ばれてきた人たちを診たのかもしれない。

そして、こう言ってしまったのかもしれない。

「これは……食中毒だ」

「そして、その後。保健所と警察が、たこ焼きの成分を分析したところ、大腸菌のような細菌ではなく、農薬の成分を検出した。ここで初めて、これが毒物混入事件であると判明した」

しかし、時は既に遅かった。食中毒と毒物による中毒、症状は似ているが処置方法はまるで違う。誤った処置をされ、症状は回復せず、あるいは更に症状が悪化していく。

その「更に症状が悪化」した人の中に、大和君がいた。

当時まだ幼い大和君は、毒物と戦えるだけの体力は備わっておらず、亡くなってしまった。

逆に考えれば、ちゃんとした処置を行っていたら、大和君は死なずに済んだのかもしれない、ということ。

「少し考えれば、素人でも気付くような判断。しかし財部医師は、それを誤ってしまった」

それに気付いた遺族の気持ちが如何様のもだったか、想像に難くない。

「当時からですか？ 財部医師への復讐を考えていたのは」

俺の問いかけに、文子さんは無言。しかしその瞳は嘘をつかない。己の力量に慢心した医師が起こした「人災」。最愛の弟を失った文子さんは、財部医師への復讐を考えた。当時から爆発物を使用し

たものを考えていたかは定かではないが、何らかの方法で実行しようとしていたのではないだろうか。

「しかし、ここで思わぬことが起きた。事件の犯人として、白川が浮上したこと」

犯人として疑惑の目を向けられることとなった白川は、これまた派手にメディアに露出した。連日連夜、周囲を記者やTVカメラが取り囲み、空からはヘリコプターが見張っていた。

「当時白川も文子さんと同じ中野地区で生活していた。大勢の記者やTVカメラが常に張り付いている状態だから、妙な行動を起こすことはできなかつた。そしてその後、大学を中退し、看護師の道へと再スタートを切った。……そうですね？」

俺はもう一歩、前に出た。

文子さんの顔が、もう目の前までできていた。

「俺も人から聞いて知ったんですけど、財部医師が教授に就任したのは、つい最近だそうですね」

あの事件後、初歩的なミスを犯した財部医師が、病院内でどんな処分が行われたのかは定かではない。しかし、現在教授に就任しているということは、重い処分ではなかつたということは間違いない。もしかしたら、処分自体無かつたのかもしれない。

「……許せなかつた」

文子さんの、涙で濡れた唇が開いた。

「一度は、復讐なんて恐ろしいことはやめよう、弟……大和の冥福だけを祈って生きていこう、そう決心した……」

言葉を紡ぎだしていく度、文子さんの瞳から大粒の涙が零れ落ちていた。

「なのに……！ あの医者が、教授となつて、大和のことなどもう忘れてしまったかのように、大きな顔でのうのうと病院を闊歩していることが、どうしても許せなかつた！」

その後も声にならない声で、話し続ける文子さん。おそらく大学病院、財部教授に対する想いのたけをぶちまけているのだろうが、

俺には聞き取ることができなかつた。

そして、最後に。

「文子さん、爆弾はどうやって？」

唯一残った疑問。どうやって爆弾を入手したのかということ。

しばらくの間があつた後、文子さんは口を開いた。

「自分で……作つたの。インターネットのサイトを観て……。材料を集めるのには苦労したけれど、こんなオバサンでも案外簡単に作れたわ……」

言い終わる頃、文子さんの声は弾んでいた。晒っているように感じる。誰の何を晒っているのだろうか……。

「文子さん……」

俺は文子さんへ半歩近付いた。

「俺は警察じゃない。そして文子さんは俺なんかよりも大人の人だ。文子さん自身の身の振り方は、文子さんにお任せします。ただ、文子さんが後悔しない判断、そして何より大和君を悲しませない判断を、お願いします」

俺は手を伸ばし、文子さんが抱えているダンボールに手をかけた。強く締められていると思われたそれは、まるでリボンを解くかのように、しゅるりと文子さんの手から離れた。

「では、失礼します」

俺はダンボールを抱え、踵を返した。

俺がクリニックの敷地を離れる間、後ろから文子さんの嗚咽が、ずっと聞こえていた……。

## 第九章 十五年前からの復讐

「壮介君！」

佐野クリニツクから少し離れた場所で、瑞希が俺を待っていた。

瑞希は俺の姿を見つけると、まるで何十年も生き別れになっていた家族と再会したかのように駆け寄ってきた。

「壮介君、よかった……」

顔を涙でくしゃくしゃにした瑞希は、俺に抱きつこうとした。

「あ、待て！」

俺は瑞希を受け止めはせず、半歩下がって瑞希を止めた。

「これ、爆弾だからな！」

俺は胸に抱えているダンボールを瑞希に見せつけた。

俺の言葉を理解したのか、瑞希の顔から一気に涙がひいた……。

「そ、壮介君……何でそんな危険なもの持つてるのよ……？」

瑞希の声は震えており、今度は俺から少しずつ離れていった。

「回収したんだよ。回収！ 瑞希、これから大学へ行くぞ。これを

駐車場の水道で、水に浸して処理するんだ」

瑞希のを見ると、街路灯で照らされたその顔は、正に顔面蒼白とい

ったカンジだ。まあ光の加減もあると思うのだが。

俺は大学の方へと続く、道を歩き始めた。瑞希はついてこない。

「無理なら帰ってもいいぞ？」

勿論、強制はしない。というか、どっちかって言うと、俺一人で

処理をしたい。瑞希を危険な目に遭わせられないからな。

しかし、俺の言い方が悪かったようだ。

「うう、行くよ……」

瑞希をムキにさせてしまった……。

……

俺たちは徒歩で大学の駐車場まで移動した。

最初瑞希は俺のかなり後方を歩いていたが、途中からヤケになつたようで、俺の隣りにくつついていた。

「死なばもろとも！」

目を合わせると、震える声でそう言ってきた。

できれば「ずっと一緒だよっ！」みたいな可愛いことを言っただけだったが、こういう時の瑞希はどうも男前な発言をするみたいだ。「よし、この辺で」

俺は駐車場のほぼ中央にダンボールを置いた。ここなら万が一爆発しても、建物への被害はないだろう。ホント、無駄に広い駐車場だ。

「じゃ、水道のホース引つ張ってくるね」

「おう、頼む」

瑞希は駐車場横に設置された水道の蛇口に、ドラムに巻かれた散水用のホースを取り付けるため、一旦この場を離れた。ホースは水道横にある倉庫の中。大したものが入っていないので、普段から鍵はかかっていない。

「さて……」

瑞希が作業をしてくれている間、俺は手持ち無沙汰。その時、地面に置かれたダンボールが視界に入る。

「オジャンにしてしまっ前に、中身を拝見させてもらいましょうかね」

他の誰かが同じことをやっていたら、俺はそいつに頭突きを喰らわせていたであろう。

ああ、俺の何というアホな好奇心……。

俺は嚴重に封印されたダンボールを開けてみることにした。

「ん？」

ここで初めて気付いたのだが、このダンボール、所々傷やシミで変色していた。昨日今日に用意したモノではなさそうなカンジだ。

蓋を封印していたガムテープを引き剥がし、開けてみた。

「んぶ！」

開けた途端、独特の黴臭さが鼻孔をついた。何でこんな臭いがするのだろうか？

「おお……これか」

それは新聞に包まれ、そこにあった。

俺が今まで持っていたもの、それは爆弾であると理解はしていた。しかし、今直にそれを見ると、背筋に冷たいものが走り、暑いなんてこれっぽっちも感じていないのに、額から汗が滴り落ちた。

俺は新聞をめくってみた。

「おお……」

計器類、導線、火薬……。

昔のマンガやドラマで見たことのある爆弾そのものが、今ここにあった。

「ん、何だこれ？」

俺は爆弾の計器部分に目があった。計器の一つに、小さな南京錠が二つぶら下がっていた。

俺はその周辺の計器類を指で辿ってみた。

「これ……安全装置か」

暗くてよく判らなかつたが、指で触った感触で、南京錠の先に絶縁体らしきものがあるのを確認した。

つまり、この南京錠を開錠しない限り、この絶縁体を外すことはできず、結果爆弾はその機能を果たせないということ。

「鍵、どこかにないかな？」

ダンボールの中に鍵が転がっていないか、俺は隅の方へ手を突っ込んだ。

何度かガサガサやっているうちに、新聞と新聞の間に、何か硬いものがあった。

ただこの硬いもの、完全に新聞の間に入り込んでしまっているようで、普通に取り出すには爆弾本体を動かさなければならぬ。それはちよつと怖かつたので、指で新聞を破り、そこから硬いものを指で引き寄せた。正直、指が攣りそうだった……。

硬いものはあつちについていたりこつちについていたりしたが、ようやく取り出すことができた。その硬いものは、予想通り鍵であった。

「ああ、随分汚れちまったな」

俺の指は新聞の間でたいぶ擦れたので、茶色く汚れてしまった。

「つたく、こんな汚れて、いつの新聞なんだよ」

俺は爆弾を包んでいた新聞に目をやった。

『王・長嶋、連夜のアベックホームラン』

「え？」

俺は爆弾を包んでいた新聞を破り取り、記事や日付を確認した。

日付は今から約四十年も前で、正に「古」新聞であった。

おいおい、ちよつと待てよ……。

この古新聞を見た俺は、とてとても「嫌な予感」がした。

もしかして、もしかして……！

俺の中で、一つの「仮説」が、ものすごいスピードで形作られていった。

「壮介君、どうしたの？」

後ろを振り向くと、瑞希がホース片手にキョトンとしていた。蛇口を捻ってこちらへ来たようで、ホースからは水が流れ出ていた。

俺は爆弾の入ったダンボールを再び封印した。

「瑞希、爆弾処理は一旦中止だ。すぐ移動するぞ！」

「へっ？」

見えた！ この事件の隠された真相が！

私が大学二回生の時、所属を決めたゼミに、その人はいた。

名前は白川悠三。

殆んど手入れをしていない白髪交じりの長髪に無精髭。見た目はどうみても四十代だが、実際は私と二つしか変わらない年齢だった。

白川と私は同じ地方の出身、そして研究しているテーマが似ていたということもあってウマが合った。

当時金のなかった私に、バイトを紹介してくれたり、飯を奢ってくれたり何かと世話を焼いてくれた。

下手な論文しか書けず、教授に力ミナリを落とされた時、好きになった女性に振られて落ち込んだ時、白川は一升瓶片手に私を励ましに来てくれた。

私にとっては、兄のような先輩だった。

しかし、そんな白川には、もう一つの顔があった。

私が大学生の頃、世は学生運動の全盛だった。

旗を掲げ、ゲバ棒を振り、様々なアジテーションが飛び交う。

世の若者が、そのエネルギーを巨大な権力に向かって撒き散らした、そんな時代……。

私は運動の類に興味がなかったので、運動に参加している学生たちを、まるで別世界の人間のように眺めていた。

しかし、あの人……白川は別だった。

白川は学内における学生運動の殿として、何百もの同志を率いていたのだ。

それを知ったのは、ある日白川の下宿に呼ばれた時であった。

部屋を見渡すと、大学で知っている白川とは、大きくかけ離れたものがズラリと並んでいた。

アジテーションが書かれた旗・ヘルメット・ゲバ棒・火薬・刃物……。

私が今まで冷やかな視線を送っていた人たちが持っているものの、大概がそこに揃っていた。

すると、白川は真剣な顔で、私の前に立った。

「俺たちと、一緒にやらないか？」

白川はそう言い、私に右手を差し出した。

私は悩んだ。時間にして十秒もなかっただろうが、丸一日考え込んだような気分であった。

そして私はこう言った。

「僕にはできません」

私は白川の部屋を出た。扉を閉めて、私は逃げるようにその場を後にした。

白川は私を追っては来なかった。

それから、私と白川は、次第に疎遠になっていってしまった……。

そして今から十五年前。白川は事故い遭い、誰にも見取られず、病院への搬送中に救急車の中で孤独に息絶えた。

「遅かったじゃ……！」

街路灯が僅かに照らす真夜中に、俺たちはある場所で、ある人物に遭遇した。

この人、誰かと待ち合わせをしていたようだが、予想に反した人物の登場に、かなり動揺しているようだった。

「あ、あんたたち、誰！」

その声に、俺は無言でダンボールを前へ突き出した。

そして、俺はダンボールをゆっくりと地面に置いた。

俺と、ある人物との間に。

「ここに文子さんは来ませんよ」

状況を飲み込めていないのだろうか。ある人物は、俺の方は見ず、ただ地面に置かれたダンボールを見つめていた。

そして俺は前に出る。

「あなたが爆破事件の犯人ですね。白川十未子さん」

俺が名前を呼んだ次の瞬間、白川は夜叉のような目つきで、俺を

睨みつけてきた。

「な、何言ってるのアンタ」

白川の視線は、明らかに俺を威嚇していた。

でも俺はブレない。

「最初の病院爆破事件。爆弾を仕掛けたのはあなたですね」

俺の単刀直入な言葉に、白川の表情は変わらなかった。さすがは、何年も裁判を闘ってきた人。それなりの修羅場はくぐっている。

でも俺は続ける。

「爆破事件直後、TVに映っているあなたを見て、一つ不思議なことがあった。顔や腕に大火傷をする人がいたのにも関わらず、一番爆弾に近い場所にいたあなたが、何故かすり傷程度で済んだのかということですよ」

すると白川は腕を組み、胸を反った。

「フン、運が良かったんだよ。それがどうかしたのかい？」

白川は鼻で笑い、俺を挑発してきた。

でも俺は話す。

「おかしいんですよ。一番爆心地に近かった人間が、火傷をしていないというのは。あなたが負った傷というのは、おそらく割れた蛍光灯かなにかの破片で切ったものです」

「だから、運が良かったんだって言っているでしょ！」

でも俺は止まらない。

「それは考えられない。ただ、もしそこに爆弾があることを知っていて、何時何分何秒に爆発が起きることも知っていて、そしてその対処法を事前に考えていれば……」

「やかましい！」

俺の言葉を、白川の怒号が遮った。見れば、こめかみに青筋が浮き上がっていた。

でも俺は怯まない。

「しかし、あの爆弾は本気のものではなかった。あれは世間の目を

自分へ向けさせるための、いわば囷の爆弾。あなたはある理由で文子さんと接触し、この爆弾を渡した」

すると白川は再び鼻で笑った。  
でも俺は進む。

「あなたは、文子さんと同じく、大学病院に対し怨みがありますね」  
俺の言葉に、白川が眉をピクツと反応させた。

いよいよ核心へ。

俺は前へ出る。

「白川悠三。あなたの十五年前に亡くなった旦那さんですね。旦那さんは十五年前、事故に遭い搬送中の救急車の中で亡くなった」

「な、何を……」

白川は何かをしゃべろうとした。

でも俺は遮った。

「何故救急車の中で亡くなったのか？ おそらく、受け入れを拒否された。最初に搬送された藤野川の大学病院に」

俺の言葉が終わっても、白川は口を真一文字に結んだままだった。何か言い返したいが、言葉が見つからない。そんなカンジだった。「何故受け入れ拒否をされたのか、そこまでは判りません。空いているベッドがなかったか、担当医の手が塞がっていたのか……」

理由が何にせよ。受け入れを拒否されたということには変わらない。い。

そう、つまり……、

「旦那は大学病院に見殺しにされた……。あなたはそう考えたのではないですか？」

もし、大学病院が受け入れてくれていれば、救われた命かもしれない。

そう、大学病院が拒否しなければ、白川悠三は死なずに済んだのかもしれない。

「そしてあなたは病院に対して復讐を考えた。しかしそんな時予想していなかったことが起こった。あの毒入りたこ焼き事件です。し

かもあなたは事件の容疑者として逮捕されてしまった」

裁判はとても長かった。一度は有罪を言い渡されそうになった。

無罪を勝ち取り、世間の目からやっと解放された時、あれから十五年の歳月が流れていた。

「違う……」

白川は小さな声で呟いた。

「はい？」

俺は一步前に出た。

「違う違う違う違う……」

白川はただ「違う」を何度も何度も連呼していた。

「違い、ますか？」

「違う！」

そして金切り声で、一つ叫んで終わった。

でも、俺は賭ける。

「な、何を？」

俺は地面に置いたダンボールを持ち上げ、ここへ来た時と同じように抱えた。

「そうですね……。判りました」

俺は白川に背を向けた。

「ハハハ。どうやら、俺の見当違いだったようです。すみません、俺もまだまだ青いですね」

そして俺は一步一步白川から離れていった。

「俺はこれから警察へ行きます。そしてこの爆弾のこと、文子さんのことを洗いざらい話してきます」

「えっ？」

白川が今、どんな顔で俺の話に耳を傾けているのかは判らないが、その声色には、明らかな動揺が滲んでいた。

「あなたが犯人じゃないとすると、これは文子さんの単独犯ということになる。文子さんは殺人未遂とか色々な罪に問われることになる。残念な話だけど……」

「ちょ、ちょっと……」

「文子さんはどの位の刑が科せられるのだろうか？ 死刑になることはないだろうけど、下手をしたら無期懲役ということになるだろうな。もう二度と、文子さんに会うことはできなくなってしまいうなあ」

「ちょっと待って！」

再び金切り声が暗闇を切り裂いた。しかし、それは先程のものは違う、悲痛な叫びであった。

俺は振り向き、白川を睨みつけた。

「ちょっとつて、何だよ？」

俺は白川へと詰め寄った。

俺は賭ける。白川の「心」に！

「どっちなんだ？ 文子さんがやったのか、それともアンタがやったのか、どっちなんだ！」

「私がつ、私がつたのよ！」

そこには、何とも悲痛な表情をした、白川十未子が立っていた。よかった。

白川十未子は、「心」を持つ人間だった……。

俺は白川と再び対峙した。

「これは……俺の推測ですけど、裁判であなたのアリバイを証言した匿名の人物というのは、文子さんですね」

白川は静かに頷いた。

「そうだよ……。死刑になるかもしれない私を、どん底から救ってくれた。そんな人を、見殺しになんかできるものか！」

白川は俺の方を見ていない。しかしその言葉には、確かな「感情」があった。

毒入りの焼き事件の裁判は、十五年前のあの日、白川十未子が毒物を混入することが可能だったかということが最大の焦点だった。最初は、夏祭り参加者の目撃証言により、毒物を混入させた時間

まで特定されていった。そして一審では有罪が濃厚となり、死刑は避けられないだろうという状況であった。

しかしこれを覆す新たな証言が浮上する。ある人物が、白川が毒物を混入させたと思われる時間帯に、別の場所で白川を目撃したというものであった。

この新証言は非常に具体的なものであった。反対に、夏祭り参加者の目撃証言は、数が多い反面、内容があやふやなものも多かった。弁護側はこの点を鋭く指摘、一気に形勢逆転となったのだ。

つまり白川はこの証言のおかげで無罪を勝ち取ったのだ。言い換えると、この証言が出てなかったらば、死刑になっていたということ。

証言をしたある人物……文子さんは、白川にとって命の恩人なのだ。

「文子さんは何故最初から証言しようとしなかったんですか？」

今まで黙ってやり取りを見ていた瑞希が、恐る恐るというカンジで訊ねてきた。俺と白川のやり取りに圧倒されたのだろう。

「怖かったんだよ。あの当時、周りは白川憎し一色だったから。文子はもう藤野川を離れていたけど、祖父母は生活しているからね。

一人だけ私の味方になった日にゃ、周りの住人が何をするか判らない……。そんな異常な状況だった」

文子さんが匿名で出廷したのも、裁判所がそれを認めたのも、地域住民の影響を恐れてのものということか。

「文子さんの弟、大和君の件は知っていたのですか？」

瑞希が続けて質問を放った。

白川は目を閉じ、ゆっくり、そして深く頷いた。

「文子の弟のことはだいぶ前から知っていた。不憫な子たちだよ……」

……

「復讐の計画はその時から？」

「いや……あの時は自分の裁判で手いっぱいだったし、世間の目もあつたからね。正直、忘れかけてたよ。でも……」

白川は俺の前に握り拳をつくつてみせた。

その拳は、小刻みに震えていた。

「文子さんから、財部教授のことを聞かされたのですね」

白川の拳の震えが大きくなった。目には光るものがあった。

「ああ……。最初は他人事のように聞いていた。でも聞いているうちに、私の中に眠っていた何かが目を覚ましたんだよ。旦那を見殺しにした病院が……。憎い」

目を覚ましてしまったのか。

十五年前から続く、復讐心が……。

「正直言つとね、最初は怖かった。でも、文子一人でさせるわけにはいかなかった。一度は絞首刑を覚悟した身体。私は文子と運命を共にしようと誓ったんだ」

そして白川はその場に力なく、ペタンと座り込んだ。

俺はその白川の前に、ダンボールを置いた。

俺は以前とつつあんより、白川悠三がかつて学生運動に参加していたことを聞いた。

「この爆弾、旦那さんが学生運動時代に入手したものですね」

すると白川は首を振った。

「……これはね、旦那が作ったものなんだ」

白川の告白に、瑞希は驚きの声を上げた。

確かに爆弾は精密なものというより、お手製というカンジであったが、まさか白川悠三自身が作っていたとは。

「昔から機械いじりが好きな人でね。作った爆弾を過激派に売って金にしていたみたい。これと前に病院で爆破したのは、残り物だよ」

「よくだこ焼き事件の家宅捜索で見つかりませんでしたね」

「家の床下をかなり深く掘って、そこに隠していたんだ。警察も床下を暴いてまで捜査はしなかった」

なるほど、それで爆弾は今まで陽の目をみずにこれたわけか。しかし今更、警察の怠慢と責めることはできない。警察が捜していたのは毒物の痕跡であり、まさか床下に爆弾が眠っているなんて夢に

も思っていないかっただろう。

白川は俺が置いたダンボールの蓋を開けた。中の爆弾を、まるで思い出の品のように眺めていた。

「南京錠の鍵の一つは、あなたが持っていますね？」

すると白川はポケットから、鍵を一つ取り出して、俺たちに見せた。

「この南京錠は、私と文子二人でつけ、それぞれで鍵を管理する。抜け駆けと裏切りを防ぐために」

鍵が二つあったのは、この爆弾は二人が揃わないと開けることはできない。これにより、お互いを守り、そしてお互いを牽制していたということなのだ。

「文子の鍵はどこに？」

白川の問いかけに、俺も鍵を取り出した。

「そうか……じゃあ、この爆弾、使うことは、できないねえ……」

白川は静かに蓋を閉め、そして全てを諦めたかのように、うな垂れた。

「ねえ、壮介君……」

瑞希が俺に声をかけてきた。

そして、俺の手をギュツと握った。

「結局、十五年前の事件って何だったの？ 結局、犯人は誰なの？」

そう、それこそ今回の事件に残った、唯一にして最大の謎。

「正直、俺には判らない。誰かが入れたのかもしれないし、幾つもの不幸な偶然が、最悪のタイミングで重なった事故かもしれない」

ただ一つはつきりしているのは、白川十未子は「無罪」だということ。

「白川さん、百万回言われたことかも知れませんが、俺も言わせてもらいます。十五年前、あなたは本当に毒物を入れていないのですね？」

「入れてない。私は、やってない！」

今まで力なくうな垂れていた白川だったが、俺の問いかけだけは、

とても力強い返答をした。

その姿に、瑞希は息を飲んでいった。

この十五年間、白川は百万回同じ答えをし続けてきたのだろう。

何回答えても、その言葉を、信じてくれる人がいないから……。

「判りました」

正直、何か言葉をかけたかった。でも、これだけしか言葉が出てこなかった。

「信じます」というのは簡単だ。しかし、俺が言うと、それはとても薄っぺらなカンジがする。

「俺たちは警察じゃない。ご自身の身の振り方は、ご自身で決めて下さい」

しばらくの間があり、そして……。

「……自首、するよ」

白川はゆっくりと立ち上がった。

「文子の手に、手錠をかけさせるわけにはいかない。あの子には、幸せになってもらいたいんだ」

白川の瞳には、揺るぎない決意が見て取れた。

ただ文子さんが、全くの無罪放免ということにはならないであろう。結果として何も手を下さなっただけであり、共犯の罪は免れることはできない。何らかの処罰の対象になるであろう。

でも俺は、これでよかったのだと思う。

勿論、罪を犯したことは残念なことだし、決して許されることではない。

ただ、白川と文子さんは、自分たちが守ろうとしたものを、これ以上悲しませるような決断はしなかった。

俺はそれで充分だと思う。

そして白川は、ポケットから携帯電話を取り出した。

何言か通話した後、携帯電話をダンボールの上に置いた。

もう何も話すことはなかった。しかし白川の目からは、不思議と

悲壮感を感じることはなかった。

「瑞希、行こうか」

「うん……」

遠くからサイレンの音が聞こえ始めた頃、俺たちはその場を離れた。

（ありがとう）

病院の敷地を出た時、後ろからそんな声が聞こえたような、気がした……。

完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1696e/>

---

十五年前からの復讐

2009年3月24日09時25分発行